

Miracles! Episode 19
- 太陽のラ・ニーニャ -



- ラえまら だいち · 上町大地 (2年) ··· 林小-戦術と乙丸心掌握の天才。2-4(監督)。 からぼり さとる . 空堰三十六(2年)...軽心足腰と無駄に豊富守行了、
- 4-6-7073-4-



- ・駒川匠(2年)…腕は確は後種カグマン。
- せんずし てっせ · 千林 哲哉 (2年) ··· 援田副目にしてサポ・リーダー。
- · 高安和輝(海)…放為下海高樂技秘。



●あらすじ?

「ミラクルズ」はとある街の女子サッカークラブチーム。 ただいまは冬の日本一を決めるオープン大会 「クイーンズカップ」めざし、にぎやかに奮闘中。 今回はいつも陽気なチームの太陽、 マキちゃんのお話らしいですぞ? はてさて、どんな騒動が巻き起こりますことやら……

●もくじ!

- 少年
- 里心
- 二兎を追う者
- 少年たち
- 旅人
- ■第
- 写真
- フェジョアーダ
- カテナチオ
- 19番
- ラ・ニーニャ

「……ヤッバア……

とか言ってももーしょーがないかぁ……」

トボトボとセカセカの混じった妙な足取りで学校への道を急ぐマキ・パメラ・キ

でもしょうがない」の狭間にあるこの速度を。 皆さんもご経験あるでしょう、遅刻しちゃった時の「急がなきゃ」と「もう急い シワダ。

ししてこのザマ。 昨日、故郷ブラジルの家族と電話でお話ししてたら盛り上がっちゃって、夜更か

じゃん、サンパウロじゃそーだよ? ブツブツ……」 「……だいたいニホンジンはなんでも急ぎすぎなんだヨー。朝なんか一二時でいー

そんなことはないだろう。

「....ん?」

年で事実ランドセルも背負ったままだ。 公園に、こんな時間にポツリ、男の子が居た。年の頃なら十かそこら、小学生高学 肩を落とし背を丸め歩いていたマキの目に、違和感がある。いつも通る大きめの

『チコクかあ』

向かわなさはよく知っている。 今まさにそうだが、時間にはわりとおおらかなマキ、 遅刻した時の学校への足の

『・・・・ヨシー』

どうせ時間はある。

г.....Воу_ј г---_ј

よりも、悪いことを見咎められた怯えが見える。 斜め後ろからベンチ越しに声を掛けると、男の子は振り向いた。その目には不審

「サボり?」

ぷい、と地面を見る。

「遅くなっても学校は行った方がいいゾー。先生とか友達とか心配してるからな

, _]

「いや、ある! 「……お姉ちゃんには関係ないだろ」

……サッカー、好きだろ」

「ミラン、いいよな!」「え」

興味を引いたもう一つの理由。その子の着てるシャツはイタリア・セリエAの強

ニタッ、と笑うと男の子は驚いた目を伏せた。、ACミランの赤黒縦縞模様だった。

カーしてこい! ミランに入れるようにネー アハハハハハー」 「アタシもサッカーやるんだ〜。ミランは憧れだよね〜。ホレ、ガッコ行ってサッ

ろう。 そんな顔になる。ほんのわずかだが、サッカーの話題で心の扉に隙間が開いたのだ 徐々に彼の顔は、見知らぬ年長者に対して警戒する顔から、なにかに惑うような、

トン、とその石造りのベンチの、隣りに座った。

「……なに、イジメられてんの?」

「……そんなんじゃない……」

「じゃー行けばいーじゃん。楽しいでしょ、ガッコ」

「……別に楽しくない……」

「なんでぇ?」トモダチとバカ言ってるだけですっごい楽しいじゃんかー!」

……そんなの、居ない」

「はへー? あれ、サッカー一緒にやる奴は?」

「居ない」

「なんだキミ、ひょっとして……」

「・・・・わあっ!」

マキは少年の胸元に鼻先を突っ込んた。クンクン。男の子は仰け反って、 固まる。

「別に臭くないな」

「……あ、あたりまえだよ!! 「アハハハハ、ゴメンゴメン、 クサイから嫌われてんのかなー、と思ってさー」 な、なんだよ、失礼な人だな!!」

「んなわけ、ないってば!!」

なんだこの人、と思って見る。

康的な小麦色が二本、輝きながら飛び出していた。 深い谷間が覗きブラウスは見たこと無いほど立体的で、短いスカートからはまた健 太陽のように笑うそのお姉さんは、褐色の肌に黒い髪緑 の瞳。 はだけた胸元から

むかし、友だちとやったゲームにいた「ダークエルフ」みたいだ。

「あっ、いや、すいませんっ!」「……ン? ネーチャン、珍しい?」

慌てて目を逸らした。

「イーヨイーヨ、ガイジンだもんなー」

ゴシゴシゴシ……と髪を撫でられた。

でも、そんな軽いスキンシップで肩の力がちょっとだけ抜ける。 お詫びの印に、

言い難いが言った。

「……ひっ、引越したてで……まだ居ないだけだよ……」

「ああ、なんだそーかー、なら早くそういいなよー。アハハハハ」

「笑うことじゃないよ……」

「アハハ、ゴメンゴメン、ネーチャンもさ、経験あるからさ。引っ越してトモダチ

「……そなんだ」

居ないの」

「ん。お姉ちゃんブラジルからニホン来たんだー。二年ちょっとぐらい前にねー。

だからそん時だーれもトモダチ居なくてサー」

ても三〇人ぐらいで食べてたのがヒトリだよヒトリー」 「参ったサー。ガッコ始まるまで、おウチでヒトリでサー。それまでは晩ご飯つっ

ル帰りたいってばっか思ってた」 「ガッコでもそうなのかな、とかもーウツってゆーの? になっても一早くブラジ

トモダチになってくれてー。で、寂しくなくなった!」 「……ところがガッコ行ってみたらイイヤツが居てねー。こいつが会った瞬間から

-

ねねね、友達になろうよ!
私、梅田もも!『ハニー・プラム・ピーチ・ボム』と でも何とでも好きなように呼んで!』 『……君、どこから来たの? カッコよすぎるよそのスタイルその肌そのおめめ!

『ううーん、たどたどしい発音がまたデリーシオウス! グッデイ!!』 『エ、ア、ハイ、ヨ、ヨロシクオネガシマス』

『あれ、私の英語、おかしい?』

『・・・・・ハ、ハア・・・・・』

ばかりに巻き込まれていくところを考えると不運だったのか。 ……あれは幸運だったのか、それともその後変な友人ばかりが増えて、変なこと

問うまでもない、ただの奇跡だ。

人間の一生には何回かそういうことが起こるという。なら、こんな早く一回目を

使ってもいいものか。

「……だからきっとそんなヤツが、君にも現れるさ」

「ん?」

少年だ。ちいさいコーチ、みたいな。 と誰しも男前になれる。いや実際よく見れば、サラサラの髪が似合うなかなかの美 男の子は立ち上がった。決意を秘めた凛とした表情。男の子はこういう顔をする

「……僕、いつか帰るんだ。元のウチへ。元の学校へ。だから友達、要らないよ」 「そんなことないだろー、どこへ行ってもトモダチはいーもんだ」 「……また、別れるのが辛いだろ」

よほど、別れが辛かったのだろう。まあ、それは確かに。

のか、 マキがなんとも言い難い顔をしていると、彼はさすがに悪いとでも思ってくれた

「……お姉ちゃん、学校は、行くよ」

「……ン。そーしな。

章とうこ。目分どってナベリンクとこったとはガッコ行くのが、ギムだ」

「ガッ……サ、サボってないよ! これから行くんだ!」 「偉そうに。自分だってサボりのクセに」

「おう! ガンバレヨー!」「……じゃ。さよなら」

ジョグだけど軸のブレてないいい走り方。ミランのユニがよく似合ってる。 男の子はランドセルを揺らして駆け出した。ああ、あれは結構やってるっぽい。

……振り返った。

「……あっ、ありがとぉう!」

照れたっぷりのその叫びに、 マキは言葉には出さず、 思い切りニッコリして小さ

く手を振った。

暖かい我が家に帰ってないマキは、 てるクスリを、分けてあげただけ。 孤独の薬に、暖かい人の声以上のものはない。故郷を離れて二年半、一度もあの それを誰より知っていた。自分もみんなに貰っ

ある方がむしろ…… 新天地でずっと過ごすとわかっていればまだいいのかもしれない。帰るところが

いや。

るものと。

で生きるものと、タンポポのようにふわふわと世界を漂い、落ちた所で花を咲かせ 人間には二種類あって、ヤクスギのように永遠かと思う時間そこに根を張りそこ

それは、自分では選べない。 きっとアタシはタンポポで、 運命ってヤツだ。 たぶんあの子もそうなんだろう。

ならば、それを楽しむしか、ない。

「……さて、ガッコガッコ」

立ち上がってスカートの埃を払う。足取りは、スキップになっていた。

18

「どどどどーん! マッキー、おっひる~~~!」

 $\hat{\varphi}^\circ$ いつものごとく満面の笑みと腕いっぱいのお弁当箱を抱えて声を掛ける、梅田も

キが、今日に限って微動だにしない。あまつさえ、 だがいつもなら「アイヨー!」とでも叫んでロケットのように垂直に席を立つマ

「......はあ.....」

ちいさなため息。

「……レレ。まっきー?」

合わない目を遠くしたまま。 ももが長い髪をだらりと垂らしてやや伏せ気味の顔を覗き込むが、 マキは焦点の

わずらい!!」 「……こっ、これはもしやまさかしてあるいはまた万が一……伝説の……こっ、 恋

ックのように勝手に並べ替える。 ももは断定の好きな女で、世界を自分の好みの模様で切り取ってはスクラップブ

だってそのほうが楽しいじゃん。

た胸元に掴みかかる。 その巨体を軽くのけぞらせるわざとらしい素人小芝居の後、いきなりマキの開け

「おっ、お相手は誰っ!? アレ!? それともアレ? もしかして、アレっ!!」

男の子と言い出すとアレかコレかソレかホレかドレかゴレで、コレとソレには既に だいたい一人を念頭に置いて問い・質す。まあ、出会いのない私たちですから、

コブが付いており、ホレは女嫌いでドレとゴレは試合以外であまり接触が無くて…

「……ぐ、ぐる……バッ。

モ、モモオ、な、なにやっでる、ノォウ?」

「はっ。気づいた!?

「あい?」

マキ、大丈夫だよ、恋のキューピッド役は私にぜ~んぶ任せて!」

弓じゃ相手死んじゃう。

またでっかい弓引いてるなぁ……ブールデルのヘラクレスか那須与一か。そんな

イ・ハー。いい?
ライバルが強力だとか、そんなことちっとも考えなくていいか 「私思うんだけどね、恋の最大の障害って、つまりじぶんの心なの! イン・マ

ら!.」

「ハア」

「ま強力なんだけどね。人数も多いしね。ま、でも、マキならきっと……えー……

マキならほら、どんな強力な相手でもー……えー……」

も居ないが、敵に回すとこれほど恐ろしい武将は居ない」と石田三成がその書、 『近江八幡丁稚羊羹記』に遺している。 中でも「主将」と呼ばれる女は難物である。「味方にするとこれほど心強い武将

「コイワズライ? 「あれつ、恋患いでしょ?」 「いっ、いったいなんの話なの?」 「……是々非々で応援するから。」

エット、それナニ、ヨーグルト?」

「小岩井のはだいたいどれも美味しいんだよね……いやそうじゃなくて」

て表情豊かな顔。 マキの顔は、さっきまでの呆としたものから普段通り、ブラジル娘の彫りが深く

「……やー、なんかボーッとしてたから。そだそだ、もうお昼だよ?」

「な、なにどうしたの」 「エッ!? あ、ああっ、お昼かー! わかった、みんなのとこ行こ……アッ!!」

「パン買うの忘れちゃった。今日遅刻しちゃってさー」

「ええっ? でも今日は私お弁当の量ちょっと少なめだから分けてあげられない

その両手に抱えられている弁当箱は大型四つ。メシ・メシ・おかず・甘いもの。

「買いに行ってくるヨ! 先行ってて!」

「あ、あー……私も手伝いに行くよ!」

「ううん、ついでに私も軽くおやつを……」「手伝ってもらうようなことじゃないよー」

「……止めないけどさ、モモ、人が何か食べたり食べようとしたりする時に無条件

でそれを欲しがる癖、止めた方がイイヨ?」

「私女でよかったよ。きっと男に生まれてたら浮気者って叱られちゃう……」 「全然違う問題だと思う」

「ああっ!」でも、メロンパンを食べていても焼きそばパンが目の前にあったら、

それは、欲しく、なるの!

イケナイ女……」

「イケナイのは確かだネ。

「急ごう! 揚げたて三色メロンパンが売り切れちゃうよ!」 てなこと言ってる場合じゃないや」

「モモ、毎食お弁当なのになんでパンに詳しいの」

「一〇時のおやつと三時のおやつに決まってるじゃない。パンとパンの食間に食べ

「……もうお昼要らない気がしてきた……」

る白米のこれがまた美味いこと!」

当をつついている教室にたどり着いたのが五分後。 ――で、守口忍、八尾由美子、森之宮胡桃つまりミラクルズ3年生が仲良くお弁

「……あれ、遅かったね二人」

「へへへ、ゴメンゴメン」 「もー、マッキーがさー、パン買い忘れちゃっててー!」

る。袋の中で包装を破ってパンを取り出し、さっそくカプリ、喰い千切る。 そんなごく普通の仕草でも、スタイル抜群の日系ブラジル四世、とてもとても様 すらりと長い足を組んで椅子に座ると、胸元のロザリオの前でちいさく十字を切

になる。

く、ワイルドというか動物的というか、まあとにかく「生きてる」感じは強い。 モゴモゴする様さえ、「少しずつ食べなさい」と教えられる純日本人女子には珍し バゲット系の固めのパンを噛み砕く大きなマウスアクション、ほおを膨らませて

ر د د 「あっ、そのヨーグルトフランス美味しいよね~。私大好き! ひとくちちょーだ

「だーかーらー、モモは先に自分のその揚げ三色メロンパンを食べなヨー!」 「ふふっ、またももの人の欲しがり病ね」

「そーだよユミ、チューイしてやってー」

「でぅえーい。ばがりまじだ~。自分の食ベマーズ」

「ん?もも、今日はパン?」

「そんな日本語初めて聞いたわ」「あ、忍ちゃん、これは単なる食前食だよ!」

ったのさ、ふふん」 「でもこれちょっと油っぽいから、バゲット系で中和するのもいいかな~、 って思

だよーもぐもぐ」 じにくくなるから、これに上から蜂蜜か、もぐもぐ練乳を垂らすと、いいと思うん 「うわ、これ一個でカロリー一六〇〇kcalだって」 「もぐもぐでもカロリー比で甘味が足りないのよもぐもぐ。油っぽくすると甘味感

だが、そのおそるべきカロリー摂取量を巨体をDFライン上で右往左往させること で使い切るのか、質量は物凄いのだが「太ってる」感じはしない。 い俊敏さで敵の眼前に立ち塞がるでしょう。あれ。 アメリカンフットボールのラインメンで、二m一二〇kgなんて巨漢が、ありえな 健啖で鳴らすミラクルズの面々だが、中でもももは「彼女は別格」と誉も高

マキとももが頬張りはじめたのを見て、三人は話をさっきまでの続きに戻す。

わけでしょう?」 「……あそこ、文学部も結構有名だったはずよ。忍の場合は家から行けた方がいい

したいし」 「そうとも限らないけどまあ、近い方がいいことはいいね。私自身もまだお稽古は

「じゃあ、あそこ、いいんじゃないかな。でもちょっと、ハードだよ?」 「もぐユーミ、忍ちゃん、なんの話?もぐ」 「わかってますよさすがに私だってー。仮にも旧帝大だもんねー」

「いや、文学ではなくて……いや、文学か」「えーっ、忍ちゃんブンガクやるのー?」忍があそこの大学の文学部どうか、って聞くから」

忍、いつものカジュアルフェイスから、ちょっと武人モード気味に、

トしたい、と思ってな。特に……古武術の古文書を研究してみたい」 「私には父のような体術の才能は無いので、どちらかといえば術理の研究でサポ

いわ」 「草書読み下すのはひとつの技術だからね。文学部の史学科なんかで鍛えた方がい

「ああー、なるほど、それで文学部ー」

27

東大だって狙えちゃう優等生のユミが解説。

人々は胡散臭そうな目を向けるからな。ま、実際、胡散臭い書物も多いのだが」 「私てつきり忍ちゃんは国際武術大学かなにかに行くものだと」 「はははつ、もしそんな大学があったとしても、私では駄目だ」 「急がねばどんどん資料は散逸してしまう。今でも『古武術』というだけで世間の 「そうかなー。忍ちゃん昔からやってるし根性もあるしセンスもいいしー」

要だろう、と思う。私は、あそこまで、人生のすべてを賭ける、そんな気迫や思い 入れは、ない」 一つの道を極めるにはおそらく、そうだな、可憐のような、『真っ直ぐさ』が必

「いや、そういう問題ではない。

丸の9番」と言われ続けてきた天才少女、もちろん現役ユース代表、 れる才能にもまして日々、サッカーのことしか考えていない。 此花可憐は、チームのエース・ストライカーだ。小さい頃から「ゆ は確かに、溢 くゆくは日の

「ああ、剣を振るうのは止めぬ。ただ重心をすこし、そちらに置いてみようかと思 「でももったいないな〜。忍ちゃんなら、宮本武蔵にだってなれそうなのにー」

リそしてオンキュー?」 「ひとの人生をそんなに縮めないで」 「意外だなぁ……でも忍ちゃんは、和服で古い本読んでるのも似合うのかも! ねね、ユーミは? ユーミは普通にトーダイ行ってカンリョーになってアマクダ

と言いつつ優しいユミ姉は笑って、

を学びつつ語学を鍛えるわ」 「ちょっといろいろ考えるところあるので、普通に法学部行って政治経済国際関係

「それ普通じゃないよ」

「ん、んー……さあどうかな? ちょっと分からないけど。ふふふ」 「あ〜、おとーさんと同じ研究するんだっけ」

隠し事をする子供のように含み笑い。

「なになに、なに意味深にしてるのー」

「だって恥ずかしいじゃない、なってもいない職業を、 『なります』とか宣言する

「私、全然恥ずかしくないよ?」

「じゃももは何になるの?」

「シショクイン!」

「ああ、地方公務員ね。いいんじゃない。安定してて」

「市職員じゃないよ、試食員。日がな一日試食する人」

「あるよお! こないだってんな職あるの?」

「あるよお! こないだテレビでやってた。ラーメンの開発してる人でね、一日中

ラーメン食べてた」

「ああ、そういうのね。それなら食品関係の商品企画か開発エンジニアって言って

ただ試食ができれば、それでいい」「商品企画とか技術とか興味ないもん。

「……ヤナギちゃんが」

胡桃が、シュークリームをくわえつつ首を突っ込む。

「シ。言してい真、忧まえ言うド・・・「ああ、あのぽっちゃりタレントの」

「ん。売れない頃、試食販売のバイトしてて」

「ほう」

だこだった、って」 「すっごく美味しそうに食べるからすごく売り上げよくて、ほうぼうから引っ張り

「それだ! それ! 美味しそうに食べるのには自信あるよ!」

「ヤー、ももの食べ方って、美味しそうを越えてびっくり人間ショー」

「またそうやって人を誉めそやして調子に乗せるでしょ? 私早食いは苦手だよ、

「超早いよ。さっきの今でもうパン一つとごはん箱ひとつ空いてんじゃん」 「ごはんはほら、飲み物だから」

大食いはともかく」

「ほんっと今いいけどその食べ方歳取ると絶対消化系の病気になる」

「あなたさすがに砂肝は持ってないでしょ」「鳥はね?」歯がないから食べ物を砂肝で磨り潰すの」

「もーは、どっちかというと、うし」「わかんないよーバラしてみないと!」

「うつしつし、胃、四つ欲しいよね私たちも!」

「イエス!

で、くーちゃんはなになるの?猫?」

右手を高く上げて、手首をキュッ、と折った。

「ホントなんだ……」

「ふふっ、いや、胡桃、体育大行って体育の先生になる、って」 「ヘーつ、先生!! 意外ー」

「あれ? んー……あそだね」

「意外?

私、運動、好きだよ?」

胡桃は汎用的な運動センスが抜群で、たぶんチームでは吹田千里と一、二を争う。

サッカー、バスケ、 してマイムマイム、 なんでも上手い。 野球水泳バレーバトミントンドッジチャンバラカルタダーツそ

そう言われれば、 体育教師に非常に向いてる気もする。

「なるほど、 「……バスケの時もいまのサッカーも、 ねえー」 チームでみんなでやるの、 楽しい

予定・はず・つもりの女子サッカー日本一の実績は、 方がいいかもしれない。なにより、中学バスケ日本一の実績と、これから掴みとる びることだろう。 彼女は会話の間や言い回しが独特なのだが、体育系ならへ夕に饒舌よりこちらの 生徒達から憧れの眼差しを浴

ーちゃんはエッチな保健の先生……みんな真面目に考えてんだね!」 「人の話、ちゃんと聞いて」 「忍は古文書を解読するトレジャーハンター、ユーミは日本を滅ぼす悪の官僚、 ζ

ういえばマキちゃんは!!」 「私は大学行ってから真面目に考えようかと思ってたよ……あっ、 マキちゃん、

そ

「ああ、そうね。ブラジル帰るの? それとも日本で進学オア就職?」

ユミに訊かれたマキはちょっと天を仰いで、苦笑い。

「……まだ、決めてないンダ」

んでも仕事あるってー」 「そかー。 よかったらマキちゃん、日本に残っちゃいなよー。ブラジル語できるんだからな

れから新興国相手のビジネスはますます盛んだろうから」 「ポルトガル語。そうね、あと社会的常識さえあれば引く手あまたじゃない?

「……ン] ……

しい、ばかりか、ちょっと沈みがちにさえ見える。 おや、と四人の手が止まった。いつも元気で陽気、 明るい彼女が、今日はおとな

「……アタシ、さ」

「うん」

「あぁ」 「なんかこのままずーっとこういう日が続くもんだと、思ってて」

卒業はまだ先だが、そうなれば、そうなる。

五人は、いやチームはバラバラに、それぞれの道を、歩む。

い出すようなことがあって」 「……ヘヘッ、今朝までそんな風に思ってたんだけど、ちょっと今朝フルサトを思

「えっ、どんなこと?」って聞いていいの?」

い、って、公園でひとりしょげててさ」 「ふせふせ」

ちっちゃい男の子が、フルサト離れて引っ越してきてさ、トモダチ居なくて寂し

「それで慰めたら、『いいんだ、僕帰るから!』って言ってさ……

かんなく、なってきたの」 そうだなぁ、おウチ、帰るおウチって、いいよなぁ、って思ったら……なんかわ

35

望郷の念ね……」

「サトゴコロ? ボーキョー?」

に、ユミが几帳面な楷書で「里心」と「望郷」と書いてあげる。 サ ッ、といつも持ち歩いてる小さなメモを取り出す。海外製らしい黄色く薄い紙

「リカイ。アリガト。「ふる『里』を想う『心』。故『郷』を『望』む心」

いい言葉だね」

 \sqrt{k}

「……でもウチ帰ると農園の仕事だしなぁ……いやーイヤじゃないんだけど……向

いてないナー……」

「もー、もも、そんなにストイックに自分を食いしん坊キャラに追い詰めないで」 「農園いーじゃない! 食べ放題なんでしょ?」

「アハハ、残念、ウチはメインが紅茶だから、食べられないヨ」

「紅茶のシフォンケーキとか、なんとでもやりようはあるわいなー!」

「アハハハッ……」

マキの実家は、 農園をやっている。オオジーチャンこと曽祖父、 岸和田亮太郎が

移民以来裸一貫、苦労に苦心を重ねて築き上げた。

に言えば「婿を取って女当主」というのが長女・マキの目の前に横たわる未来予想 一家は四代一族ほぼ全員で農園経営に当たっており、つまり普通に行くと日本流

図、だ。

ホンにもちょっと」 「ウン。みんな紅茶は飲まないヨ。ほとんど全部輸出用。 「あ、でも紅茶って意外だね。ブラジルといえば何と言っても珈琲」 ウチはイギリスとか、

「ヘーっ、驚き。遠い国の人の食べ物、作ってるんだね」 「こないだ松茸、食べたけど」

胡桃がシュークリー ムの底に指を立てた。松茸のつもり。

「トルコから来てた」

「うわお」

「グローバルゲーションとか言うの、それ」

「グローバリゼーションね。

そっか。紅茶摘み娘。可愛いじゃない?」

て、アタシが今回日本に来たのだって、最後までアメリカにしろー、アメリカにし 「違うよもー、オカーサンがね、経理担当なの。だから代わりにやらせようとして

「あら。別に経理なら経理の勉強、日本でもできるじゃない」

ろー、って!」

メリカが光り輝く青春の国なんだヨー」 「オカーサンアメリカに留学しててー、そこでオトーサンと知り合ったからー、 ア

「あははっ」

「うん、まあね。キシワダ家の人間は一回海外へ出ないといけないの」 「じゃマキが日本へ来たのは、例のゴッド・ファーザーのオススメ?」

「なかなか積極的な教育方針だな」

「ご自身がご苦労されたでしょうから、可愛い子には旅をさせよ、なんでしょう

1

「じゃあ、それまであまり日本には興味無かったの?」

で。オカーサン今でも苦労してるよ、アハハ」 「ウウン、ウチ家の中では日本語も使うからー。これもオオジーチャンのゲンメー

「あらら」

ンとブラジルジンのハーフなんで、オトーサンは3/4ニホンジンなのー」 で、オジーチャンってニホンジンなんだー。で、結婚したオバーチャンもニホンジ 「はし。 「あ、えっとね、ウチはオオジーチャンと死んだオオバーチャンがニホンジンなの 「お父さんも大変なんじゃない? 三代目ぐらいになるともう」

「ん。アタシ3/8ニホンジンだよ」あれ、てことはマキは」

なにそれ。エレちゃんとおんなじぐらいじゃない」 いとばかり。さっすがブラジル人!とか思ってたのに思ったより日本人じゃない。 「やだ、わたしもうマキは四世って聞いてたからてっきり1/16ぐらいしか入ってな

見かけからはまるでそんな風には見えないが、これもグローバリゼーションか。

「アァ、エレは見事にハーフっぽいよねー」

ごつくとてもスラブではない。「ああ半分ずつですね」と言われれば膝を打つ。 ェクトブロンド、だがなんとなく顔の輪郭が丸くぷよぷよの餅肌であり、下半身が それに比べれば全然「ガイジン」だ。 平野エレーナは父日本母ロシアのミックスで、雪のような肌に水色の瞳にパ ーフ

アタシひとりだもん」 「オカーサンの方がもうわけわからないぐらい混ざってるからネ。 緑の目、 ウチで

あっかんベー、をした。

「へえ〜つ……」

「弟はね、目は青。アタシと逆で肌真っ白。エレちゃんみたいなブロンドで」

「あ、そういえば弟が居るって言ってたよね。写真とか無いの?」 「ヘーっ! 姉弟でそんなに違うの!」

「無いよそんなのー。なんでアタシがあんなヤツの写真持ち歩かなきゃなんないの

40

「一般的に姉は弟のことが気になるんじゃないの? ユミちゃん謙司君にお土産と

「まあ、ウチはちょっと離れてるから……」か持って帰ってあげるよねー」

ばいいよ? すごい才能あったら。デモいっつもビリなんだよー!」 ー。もーオトーサン疲れてるのにレースのたんびに応援に行ってー。んで一等取れ なるって聞かないから危ないっつって家中で反対してんだけどカート始めちゃって 「モー、あいつテキトーなんだよ、アイルトン・セナに憧れててサー。レーサーに 「ふふふっ」

「ビビリなんだよアクセル開けないから観ててもスッゲー遅

なあいつには甘いんだ!(ちょっとカオがよくておとなしいからって!」 でもオトーサンもオカーサンも、ウウン、オジーチャンもオバーチャンもみーん

「おっ、イケメンなの?」

「よくベッカムとトム・クルーズを足して二で割った、って言われる」

「「写真持って来なさい」」

キネンとか好きでしょミンナ」 「その人は知らないなぁ」 「あ、そっか、ニホンのオンナノコが好きそうな顔ではあるかもねー。 ミカ・ハッ

「……上町大地とだと、どっちが上」

「ダイチと?

んー……ダイチの九○%ぐらいじゃない?」

「ェー……ソーカナー……」

兄弟姉妹は兄弟姉妹の容姿にだいたい厳しい。

「でも楽しそうなお家だよね~。私たちは寂しいけど、マキちゃんにとっては、

「んー……

るのもいいのかなー」

……あーやっぱりなんかヤダ、もうちょっとワイワイやってたーい! ウン、ア

タシもクーの真似して、タイイクのセンセイ、やろっかな!」

「ウェルカム」

「ふふっ。まあ、それもいいかもね。まだ時間はもうちょっとだけあるから、じっ

くり考えれば」

「そうだ! そうだよ!

帰

「アッ、ソレソレ! 昨日、電話してたら幼馴染の子がひとり結婚しててー」 何と言っても実家から逃げ出すだけなら、『お嫁さん』って手があるよ!」

「えーっ!!」」

「あっ、早いよブラジル。フツー。もうハタチすぎると半分ぐらいは結婚してる」

「あららら」

ヨ~~~シ!

イッチョウ、ダイチあたりを口説いてネ」

「いやぁ~~~~~……」」

の興味なさもさることながら、その前に万里の長城みたいな絶対防壁が…… いやその人はですね、その人そのものの「あなたホモ?」ってぐらいそゆことへ

「アレッ、ナニ、みんな狙ってるの?」

「いやそりゃアレがソレすりゃそりゃ最高だけど」

「宝くじ」

「マキちゃん。それはね、きっと……チョコ部分を食べ終わったチョココロネをス 「私は負けるとわかってる戦いに乗り出すほど無謀じゃないつもり」

トローにしてネクターを一ガロン飲むぐらい、難しいことだよ」

「前半要るのか」

「アハハッ、ジョーダンジョーダン。

好きな人めがけて駆けつけちゃうぐらいに!」 恋っていうのは、きっともっと情熱的なもんだネ。そんなこと言う暇もないほど、

「おっ、ラテンなお言葉」

「ふふっ、そうね。って、私経験無いけど」

じゃないのかー! その髪飾りは永遠の愛の証と聞いたぞー!」

「ホントかユミ姉ー! アマゾンの奥地で酋長の息子とアバンチュールしてきたん

ちー!?

「どの子がそんな風に話歪めたの!? カレ!?

「あいつめ……」 「アハハハハ」

ろん、サンパウロ郊外の故郷の空とつながっている。 パンパン、とパンくずのついた指先を払って、マキは窓から空を見上げた。

どこへ行ってなにをするのか。

……と、思えるのは帰る家があるからか。 ひょっとすると、あの雲のようにあてどなくさまよい続ける人生なのか。 ……それって別に悪くないんじゃない?

家がまだ、家になっていないのだろう。 ふと、朝の彼を思い出した。

幸せ者なんだな、 アタシにはあの家もあれば、ここもある。

そう思った。

45

■ 二兎を追う者

放課後は練習。本日はウォームアップの後、 オフェンスチームとディフェン

スチームに分かれての、8-8紅白戦。

ンズカップ」目指して猛特訓中。 で構成される。現在はお正月に行われる女子クラブチーム日本一決定戦、 女子サッカークラブチーム「ミラクルズ」は高校1年から3年までの選手一六人

ても、 績があることと、現役ユース代表を二人も擁していること。優勝候補は大げさにし そんじょそこいらの草チームとは違うのは、昨年地方予選を突破し本戦に出た実 強豪、とぐらいは言っていい。

指揮官、上町大地は鋭 キョロキョロと見るのではなく、ボールサイドを眺めるように見ている。それで い目つきで、ジッと腕を組む。

ざ講評や分析が始まると微に入り細を穿つのだから、不思議だ。 真横に立ち同じくゲームを一生懸命見ているマネージャー住吉古都。

「……やっぱりミラクルズは、攻撃のチームですねぇ……」

ムが必死で防ぐ。 いつもどおり、というか、オフェンスチームが押しまくるのをディフェンスチー

胡桃を展開軸にどっしり置いて、その周りを可憐・ありす・ナナが自由自在に動 個々の能力が高いこともあるが、実戦でいつも組んでるのが大きい。

「……いや、よく守れてるよ」

流乃もほぼ固定スタメンであり、そう簡単にはゴールは割らせない。 実戦で組むといえばディフェンスチームの4バック、右から明日葉・蘭・もも・

「問題は逆側だ、と思う。特にDTの攻撃」

に忍。ディフェンスTの攻撃は、 本日のオフェンスTの守備は美緒をセンターに、はなことエレーナが両翼、 マキと愛の2トップをユミ姉が下支えする。 G K

Kは千里)

だけど」 られる。ユミ姉からのパスは期待できなくても、もものフィードもあれば流乃と明 日葉のクロスもあるわけだから、チャンスメイクはそう難しくはない……はずなん 「三人で守ってるところに2トップだから、ちょっとギャップ作ればすぐ裏へ抜け

同数なら攻撃側のチャンスと言える。 大雑把にいえばゴール前が四対四、逆のゴール前が三対三になっているわけで、

「ふふつ」 「ユミ姉さんとこがキャプテンだと、だいぶ違うんですけど」 「いや、あの人は反則みたいな人なので、それでは腕いや脚が上がらん」

美緒キャプテンはスイッチが入ると「どんな手を使ってでも」チャンスを作ろう

創造性の訓練にならない。 とするので、周りは思わずそれに仔犬のように従ってしまう。それでは、自主性や

交わしている。 事実、ちょっとプレーが途切れたところで、愛がマキと手振りを交えつつ言葉を

わかった。 下がるか、サイドに開いてチャンスを作ってくれ。

そんな感じだった。

ーン、と右タッチ奥めがけて蹴ると、そこに、マキ。 ゲームが再開されると、早速ユミ姉がボールを奪い、 ももにリターン。それをポ

「チャンス!」

指示を待つまでもなくエレーナが守備に走り、真正面着。 ピタリ、合うとそれを拾って、ゴール目指して真一文字にドリブるマキ、美緒の

「クロス!」

サイドは取れない上に美緒の迎撃にもわずかに時間的余裕がある。 さっきの今だったからか、愛は万全の体制で美緒の背後におり、 今上げればオフ

……だがマキは上げず、エレーナの正面でピタリ。

ポジションを探る。後方からユミ姉に中央守備を任せた蘭も駆け上がる。 ことに気づいた美緒と駆け引きをしながら、マイナスに折り返された時に対応する 突破 してマイナスのクロスは、それはそれで選択肢である。愛、 背後を取られた

切れこむ色気を誘いつつ、簡単には縦にも走れないようにプレッシャー。 持って、持って、持って…… だがエレーナもマキの縦突破は十分警戒している、いいポジション取りで内側へ

「あーだめだ」

ようやくその右を大回りで駆け上がる明日葉、 そちらへ、パス。 すぐマキを捨て

そちらを追うエレーナ、マイナスのクロスを上げた瞬間に脚に当てて、外に出した。

「……持ちすぎ、ですねぇ」

「んー・・・・」

裕を持たれてしまっては、そのプレーの意義は薄い。 を突き崩してナンボ、だ。いかに一人を抜こうと、その向こうをガッチリ固める余 ウィング、もしくはサイドハーフの第一の存在意義は「突破」であり、敵の陣形

「調子に乗ってる時のキレのいいプレーは破壊力抜群なんだけどね。なんかこう…

フォローするでもなく呟くと、小首を傾げる大地。

にモヤモヤしないですよね」 「でも、コーチが首かしげるのわかります、ナナさんだと同じことやってもこんな 「まあオフェンシブハーフはあんなもんかなぁ……」

「うん。

しかない!』と言わんばかりに送るんだよね。だからこっちも、『行け!』って思 あーそうだね、こっとん偉い。そう、ナナだとたぶん、今のだと、『この選択肢

「あっ、そんな感じです!」

央に送ってもいい。それこそロングシュート気味にね。パワーあるから」 いいし、明日葉囮に中へ切れてってもいいし、あの間合いなら無理矢理クロスを中 「マキなら、あそこからでもいろいろやれるはずなんだよ。エレに突っかかっても

だ、見た目ほど積極的じゃないというか、おとなしいというか、安全志向という 「それなのにえらくあっさり、ポイとボール渡しちゃうから、なんかこう……そう

「そうですね」

するのかもしれません」 「あー……だから勝ちゲームで『かき回せ!』って言われた時はすっごくイキイキ 「そんな感じですよね。外見は物凄いウイングみたいですもんね、ふふっ」 「そうなんだよ、実際身体能力もかなり高いのに……ああ、もったいない」

「あー……そうだね、そういう時はまさにサンバ・クイーンのように暴れてる。

52

けどそういう場合ばっかりじゃないしね。ていうか、途中投入は困難を打開して

欲しいから、やるのであって」

「第一そんな時はウチのチーム、みんなそうですしね」

「そうなんだよお調子者ばかりで、ホント困る」

まあ一番のお調子者はコーチだと思いますけど、なんてことは口に出さない。

って決めた方がいいのか……」 「……まあ中途半端な使い方してる僕が悪いのかなぁ。中盤なら中盤、 前なら前、

「そんなに違うものなんです?」

「使う方と使われる方だからね。どこでも苦にしない人もいるけど、どちらかが苦

手な人もいる」

「持って生まれた性格もあるかな」「心構え、みたいなものです?」

「あー、じゃなおのことマキさんどっちかわかんないですよね」

「そうそう、ラテン系のじゃじゃ馬かと思えば意外にマトモだからね。 意外ってい

うと失礼だけど」

「そうなんですよ、胸元ガッバー開けてみじっかいスカート履いてるのに酒タバコ

盛り場一切無し。日曜日は教会でお祈りですよ?」

「真面目だよね、漢字メモとか取ってるし」

「ええ」

どちらでも使える、というと聞こえはいいが、『二兎を追う者』という諺もある。

「でも、もう前線は足りてませんか?」

「いや、前線は疲労なんかもあるので、 何枚でも欲しい」

「欲張りなんだから。

「サイドバックゥ?」 私、右サイドバックなんかどうかな、って思うんですけど」

「守備的な明日葉ちゃんの代わりに。足速いしクロス巧いし、そう、むしろスピー

ドに乗って勝負!で!」

大地、顎に手を当てちょっと考えて、

「駄目だ駄目だ駄目だ駄目だ駄目だ」

「すっごいダメ出ましたね」

「守備が粗すぎる。マキの守備は穴がありすぎるんだ。とても最終ラインでなんか

怖くて使えない」

「だって、流乃さんだって」

「流乃は戻ってれば守れるから。戻らないだけで」

「同じじゃないですかー!」

「いや……いや、だいぶ違う。居ないなら埋めればいいけど、 居て抜かれると辛

V

「そうなんですかぁ……私は、プレイヤーではないのでわからないですけど……」

うむ

のスターばかりを並べるような。 まあ確かに、素人考えかもしれない。 「ぼくのかんがえた最強ちーむ!」 に攻撃

またボールがマキに渡った。エレーナが余裕で応対する。今回はサーッと早

めに明日葉が駆け上がり、ユミ姉がフォローに走る。

これではまるで侍従を従えるお姫様だ。 本来切り込み隊長として単騎傷だらけになって血路を切り拓くはずのウィングが、

しかし今回も、じっくり構えて役者が揃ったところで……

バンッ!

思いつきのようにゆる~いロビングを中央に上げた。愛が食いつきに走るが、美

緒が邪魔する、うちに飛び出した忍が、悠々キャッチ。 うなだれるマキ、一応手を上げて謝る愛、何事もなかったように定位置に戻る明

「ちゅーとはんぱな……」」

日葉とユミ姉。

こりゃなんとかせなあきませんね、思わずコーチとマネージャーは顔を見合わせ

て同じ言葉を、呟いた。

訊いてみた。 口 ッカールーム、マキは早速、さっき大地に言われた問いを念頭に、

かもわからないうちから、考えることは無駄である。 留学生をやって得た知恵といえば、「わからなければまず聞け」。問題点がどこ

まずはニホンを代表する司令塔、とおだてつつ、ナルミ・シショウ。

「……あ? ゴールかアシスト、どっちが好きか?」

きとか、無いんです。 「そりゃー……うーん、なんかウチの場合は、ぜんぜん別モンなんで、どっちが好

「ウン」

させた時の『ウヒョー』って感じはこれがまた、もう!」 そりゃゴール決めりゃテンションあがりまっせ? せやけど、FWにゴール決め

「ハア」

ますかね。なんて言うんやろなー……ああ、ウチの人おったら巧いこと言うてくれ 「なんて言いますのん、『ゲームを支配した』みたいなね、エラソーな感じと言い

んねやろけど」

「ワカラナクモナイ」 「なにより点奪った人間がニッコー笑って駆け寄ってくんのがたまりませんな。

電

「ナナらしいネ……それって、昔から?」車で席譲るんの百倍ぐらい盛り上がる」

てウチはオフェンシブハーフなんですって!」 「へ? あ、うんまー……そうですね、子供ん時から。もう、だから、生まれ持っ

ナナは胸を張った。伊達や酔狂で「日本一の攻撃的MFになりたいから」と、名

門校のお誘いを蹴ったわけではない。

ではお次は、灼熱のストライカー、カレン・センセイ。

「はいつ? ゴールとアシスト、ですか?

そんなの、ゴールに、決まってるじゃないですか!」

目を剥いて何を愚問を、と言わんばかりに突っかかる。

そう、普通のパスと同じで、出した瞬間、それが誰かのゴールになろうが敵に渡ろ 「アシストなんて……あたしにとってはどーでもいーんですよ、なんていうか……

うが知ったこっちゃないというか」

「フムフム」

「ゴールとは、ぜんぜんそんな、比べるとか比べないとかって次元の話じゃないで

しいですよ?でもそれは全然別の話かなぁ」

いやそりゃ、結果的にアシストになって、点入って、チームが勝てば、

それは嬉

「でもこう……例えばカレンのシュートが弾かれて誰か詰めて、ほとんどカレンの

ゴールだ、っていうようなのも、あるでショ?」

あたしもそういうの貰うことが多いんで」 「あーありますね。でもそれはその人のゴールだなあ。あたし的には。ていうか、

「ナルホド。じゃPKとかも?」

「もっちろんもっと蹴りたいですよー! 1点は1点です! ……でも、まあ、 キ

ャプテンですよね、ひひっ」 「ダヨネェ」

……着替えながらマキは考え込んだ。事程左様にMFとFW、中盤と前線では全

く違うのか。

アタシ、そんなこと、考えたこともなかったなぁ……

シュートが入って嬉しい、クロスがピシャリと決まって嬉しい、似たような喜び、

みたいに。

こういういい加減なことでは、やはり道は極められないのか。シノブが言ってた

(……むずかしいナー!)

訊いてなんだかますます、わからなくなった。と同時に、情けなくなってきた。

『ゴールとアシスト、どっちが好き?』

マキは、肩を落として家路についた。こんな簡単な問にさえ答えられない、自分が。

■ 少年たち

――翌日、今日は練習が無いので早めに帰る、と。

例の公園で子供たちがワイワイと遊んでる中、一人離れてあの石のベンチに座る、

あの子。

マキ、ほおっておけなくて。

「つ!」

ポン、と背中を叩くと振り返る、不審と驚きの色に、かすかに喜びが交じる。

「……ん」

「今日はサボってないだろーな!」

「行ったよちゃんと。お姉ちゃんこそ今日も遅刻したんじゃないの」

「ハハッ、今日はバッチリー分前サ」

そこかしこで遊んでるグループが居る。中にはもちろん、サッカーも。

「……あれ、入れてもらいなヨ」

「なんだ、全然知らない連中か?」

「……同じ学校……だと思うけど」

「じゃーいーじゃん。サッカー、多い方が楽しいから断られないぜ?」

「わつ、ちょつ、ちょつと!」

マキは引きずるように彼を連れ、ボールを追い掛け回す一群に声を掛けた。

「……サッカー、やりたいんだヨ! 二人、混ぜて!」

一瞬芳しくない反応の中に、「ええっ?」「なんだなんだ」「えーっ……」

「はっ?」「なにそれ」「えっ?」「……あっ、この人、ミラクルズの補欠の人だ!」

「たはは……ホケツか……」

「ああそうとも!」いちおー、全国大会出てんだぜ?」が、知ってりゃあ話は早い。

「「おおーーーっ!」」

まあこのぐらいの男の子というのは犬猫ぐらいの脳みそしかないので、非常にわ

かりやすい。

「ちょっと身体動かしたいんだ! なあいいだろちょっとぐらい!」

胡散臭げだった目が「全国大会」の四文字でいきなりキラキラ輝き出す。

「あ、い、いいですよ……な?」

「カック」「いいよ」「はいー」

「ヨカッタ! じゃあこの……えーこの……

……えと、名前なんだつけ?」

「あ……亮太。麻生亮太」

「リョータも!」

――いざプレーが始まると、さすがに文字通り大人と子供。

切り返しで、すがりつく少年たちはただ無様に滑り転がるばかり。

簡単にボールを奪うや華麗なステップで寄る相手を翻弄し、大きなコンパス深い

思う存分遊んだ後、おおげさにホップ・ステップ・ジャンプを刻んでゴール真正

「ダッシャーーーーーーッ!」

「ヒッ!」 思いっくそ左足で擦り上げるシュートが、GKを襲う。

ーパー君が立ってた位置をトルネードのように巻き込んで、遥か後ろの公園の金網 思わず身を縮め避けるキーパー正解、見たこと無いカーブを描くシュートは、キ ガッシャーン!ビヨンビヨンビヨン……

「「すっげーーーーーーっ……」」

伝聞を現実で裏打ちされて、もう少年達のピュアなハートは奪われっぱなしであ

る。

ない部分も気が気でない。 いたブラウスと短いスカートを振り乱して大暴れするのだから、ハートのピュアで プレーの華やかさもさることながら、年頃のボインバインのお姉さんが胸元の開

用しているのだが、それは彼らに伝えない方がいいだろう。彼らぐらいの歳の男の 子にとってスカートの中に入っているのはパンツではない。 ちなみにマキはいついかなる時でも暴れられるようたいてい一分丈スパッツを着

夢である。

「……ヤマちゃん、おれがキーパーやる!」 ちょっと小太りだが気迫ありそうな子が、慌ててカバンに走ってGKグローブを

取り出した。ということは……

こういう子居るよね、大人に説明したがる子。「マッツンは少年団入ってるんです。巧いですよ!」

「……ククッ。ヨゥシ……イッチョウ、モンデヤルカ!」

「来いッ!」

オウ、 いい姿勢。まあもちろん本気を出せば無理からゴールするのは朝飯前だ、

が。

ゴールとアシスト。マキはふと、思い出した。

そうだ。

「……リョータ!」

「ん!」

亮太が走る。サッ、とボールホルダーに身体を入れてキレイに奪う。

おお、やるう。やつぱ結構やつてんだ。

姿勢も、昨日のミランのユニならまるでアンドレア・ピルロのような、と言うと褒 ぴたり、脚に吸い付くような優しいタッチ。寸分の狂いもない見事なパス。その サッ、と手を挙げるとぽーん、とパスが出た。

めすぎか。

66

右足ワンタッチで左足前に落として、このボールなら、なんの工夫も要らない。

「シャアッ!」

ナメてたわけではない。が、すこしテキトーすぎ「……フンッ!」

て、マッツン君が見事に両手パンチングではたき落とした。 ナメてたわけではない。が、すこしテキトーすぎたかもしれない。 コースが甘く

負けは負けだ。確かに悔しい。「ヤッターーーッ!!」

「来いッ!」 もう一度ダーッ!」

彼 の声はちょっと震えていた。たぶん、 生涯最強の敵を前にして、テンションが

天井なのだろう。

ボールの奪い合いにわざと参加せず、すこし離れた位置で見守った。

自軍の少年のひとりが奪った。

った。 手を挙げる、もちろん「パァス!」

手を挙げる、もちろん出てくるポテポテのパスを拾って、ルックアップ。 目が合

「イケッ!」

中央のスペースを駆け上がる亮太。

パスを出す。いつもどおり強めのパス、 それを難なくトラップし、ドリブルを始

める亮太。

団子が、ワーッとそれを追う。

マキはこそこそと陣地を進めて、取り囲まれ今にもボールを奪われそうな彼に、

指示を出した。

もちろん試合じゃできないアホな指示だが、亮太は応えて、すぱーん、と先ほど

同様いいパスをくれた。

また団子がワーッ、とボールを奪いに来る。

ためて、ひきつけて、こらえて、

リターン!

リョータに返った。マッツンと真正面、一対一。鋭い振り脚に反応するGK、

彼は最後の最後でキュッ、と足首を捻った。

ふわり

ゆる~いループ気味のシュートが、GKの逆を軽やかに破った。

「ウワウオウーーーッ!!」

マキ思わず大声で叫ぶ。オシャレこのうえないチップ・キック、こんなのチーム

でもなかなか見れない。

「ナイッシューーーーッ!!」 ニコ……とはじめて笑顔を見せたリョータに、駆け寄って抱き締めた。

ギュギュギュギュギューーーッ……

ああ、ナナの気持ちがよくわかる。あの「ニコ……」がたまらなく、 嬉しい。

「わ、わわ、わわ……」

トラウマもののドギマギ・タイム。 でもその豊満な胸に顔埋められたリョーちゃんはこれそれどころではない。

「なんだよケーケンシャかよー!!」「お姉さんも凄いけど君も凄い!!」「すっ、すげーなおまえ!」

「ちくしょう、やられちまったぜ……おまえ、 見ない顔だな、どこに住んでんだ」

「あ、あぁ、僕、引っ越してきたてで……」

らなきゃ、という子が出てきて、 その後もしばらく、ストリートサッカーを愉しんだ。日が傾く。そろそろ帰

「……オウ、みんな、今日はアリガト!

楽しかったよ!!」

「いいえ!」「こちらこそ!」「また一緒にやってください!」

い。男の子は元服前までが華だよね。 すっかりみんな、遠い異国から来たサッカーの女神様の虜である。 素直でよろし

「アッ、そうだこれ……配れって言われてんだ」

プロデューサー空堀三十六謹製、専属カメラマン駒川匠の撮った超カッコイイマキ のドリブル姿に、「19 MAKI」と入れてある。裏面は制服姿の笑顔という、一枚で 二度美味しい仕様。もちろん本人のサイン入り。 マキはカバンから、ミラクルズ・トレーディングカードを取り出した。もちろん

に来てチョーダイ!!」 「はいつ!」「いきますいきます!」 「モチロン! んで、今度の日曜試合あんだ。マルタマ公園で! よかったら、 「ワーッ、カッケーッ!」「すごいすごい」「もらっていいんですか?」 「マキさんも出るんですか!?」

観

- ウ……ん?

エー……アタシはヒミツヘーキなので、チームがピンチになんないと、 出な

. ! ?

「えーつ……」

「はあ……」

んダ。つまりアタシは、ポリースマン」 「アタシが出ない時は、 相手が弱いってことなので、これは、 喜ばなきゃいけない

亮太が、ひとりクスクス笑ってる。

簡単に付けられる番号じゃないぞー!」 「ちなみにその19番は、10番と9番を合わせたスーパーナンバーだヨ。なかなか

「ホントですかぁ?」

さすがにこのへんになってくると小学生とはいえ高学年相手だと難しい。が、

「……あ。早く帰らなきゃ。もう時間ヤバイ」

「じゃマキさん、さよならー!」「あ、オレもオレも」

「僕も帰ります、また遊んでくださーい!」

「オーウ! チャウ~ッ!」「バイバーイ!!」

三々五々、子供たちは暖かいお家へと帰っていった。残されたのは。

「……マキさん、送ってくよ」「……リョータ、帰んないの?」

「いいよそんなのー! ホレ、早く帰って晩ご飯しっかり食べろ」

「……お母さん、遅いんだ。仕事で。だから何時までに帰るとか、ない」

「……お弁当買う。お金もらってる」「ン……エ、じゃあ、ごはんは?」

おそらく本人は普通にしゃべってるつもりだろうが、まるでしょげかえる仔犬の

ようだ。

「……ヨシ! じゃあ、メシ喰いに行こっか!!」

「ネーチャンも独りなんだー、って言ったろ?」ちょーどいいから、さ!」 「わ! ちょつ、ちょっと……」

「……わ、わかったよ……」

ドキとは違うドキドキが、喉の奥で高鳴った。 グイグイと肩を抱かれ引き寄せられて頬が胸に当たる。さっきまでの運動のドキ

+

やってきましたはチームの定宿、ラーメンの『山嵐』

「おっ、なに彼氏?」
「マイドーッ!!」
「マイドーッ!!」

「 ウン!! 」

亮太は顔を真っ赤にするだけ。

「引っ越してきたばかりって。だからマスターのうンまいラーメンを食べさせてあ「ワハハハハハ! 見かけない顔だね」

げてよ!」

75

「マカセロ。

少年、どっちから来た。東か、西か?」

「ヨゥシ、ちょっと待ってろよ!」「え……あ、ひ、東……かな」

「ワクワク!」

ヒゲの大将は早速寸胴に取り組む。

「ウン! アタシ、自炊って苦手でさー。何作ってもヘタなんだー。 「……マキさん、よく来るんですか?」

のってー。だから最近は諦めてるー」

「はは・・・・・」

「ニホンいいよね、何食べてもすっごい美味しいよ~」

「そうですか」

『エスポワール』とか、ドーナツの『エンゼル・ドーナツ』とか」 「ウン! あ、また今度いつも行ってるお店教えたげよっか。んとねー、ケーキの

『エンド』は僕の街にもありましたよ」

マズイのなん

「あ。アハハ。そっか、そだね!

それよりリョータ、止めなよそんなタニンギョーギな。トモダチでしょー?」

「あ、はい……あ、うん。

マキさ……お姉ちゃん、どうして僕に、こんな親切にしてくれるんですか……し

てくれるの?」

てさ。そう!
グーゼンだけど、名前がリョータローって言うんだよ。家族はリョ 「あぁ……アタシさ、弟居るんだ。リョータ見てるとなんかちょっと思い出しちゃ

ーって言ってるけど」

「そうなんだ……」

「だから、オネーチャンって呼んでいいぞ」

「ふふつ・・・・・はい」 「あとはイタリア料理の『タベルナ風花』かナ。あそこは美味しいネェ」

「あそこは美味いな。はい、お待ち!」

麺が沈んでいた。具はもやし、白髪葱、細切り叉焼、だけ。 マスターが笑顔と共にサーブしたラーメンは、澄んだ黄金色のスープに行儀よく

「鶏ガラと野菜たっぷりで採ったあっさりスープ。 [¯]ウワ、こんなの見たこと無い。これナニ?」 まあ喰ってみて」

「ヨウシ、イッタダッキマース!」

「……いただきます」

「美味しいです!」

「だろ!?」

鼻ヒクヒクさせる腕組みマスター。

「東の方だと醤油キツめだろ、あとは魚介系とか背脂チャッチャとかな。パンチも

味の叉焼も今日はスープの脇役に徹する。食べ始めると、お腹がぺこぺこに減って が出てる。シャキシャキの具がつるつるの麺を飽きさせず、いつもは存在感過多気 いいがたまにはアッサリしたのもよかろうと……聞いてないな」 二人はもうズゾゾズゾゾが止まらない。ふんわり優しい味なのに、バッチリ旨み

たことにも気づく。

ニヤリ笑って次の準備に向かう、職人。

「うん!」

「ホラ、いい街だろここ! ラーメンもウマイし! キレーなネーチャンもいる

<u>[</u>

「……ふふふふっ。そんな早くわかんないよ……」

にして帰らせてもらおうか、ってそればっか考えてた」 「……アタシもさ、最初の何日かはすっごく後悔してさ、もうどうやって留学無し

「けどまあ、こないだ言ったけどトモダチできて、ガッコ楽しくなって、勇気出し

て街歩いて知らない食べ物食べてたら、美味しいのもあって…… だからまあ、しばらく、そうだ、タビビトみたいな気持ちで、楽しめばいーヨ」

「……ありがとう、マキさ……お姉ちゃん」

「アッ、ほら、ハナミズ出てるぞ。

.....ホラ」

目の前のティッシュを抜いて、鼻頭に当ててやった。

亮太は照れながらゴシゴシ擦る。 照れ笑いが可愛い。やっぱり人間基本的に、眉間に縦ジワはよろしくない。

「サッカー、結構やってんだろ」

「うん。向こうでチームに入ってた。お姉ちゃんも凄いね。プロみたい」 「アッハッハ、おだてるなよー。ぜーんぜんさー。ホケツホケツ」

「そうなんだ。お姉ちゃんがベンチって、強いチームなんだね」 「まあネェ。ユース代表なんか居るからネェ」

「わ、わぁ、そうなんだ!」

「リョータこそなかなか巧いじゃん? パスとか、ピルロみたいだったぜ?」

「ふふふっ、おだてるなよー、だよ。

「オウ。ネーチャンはイタリアは窮屈であんま好きじゃない。リーガの方がい でも、セリエA好きなんだ。ピルロみたいにできたらなぁ、って……」

「ふふっ、そうみたいだね!」

「でもあのチップキックはチョーオシャレだった!」

「あれはね、トッティのマネ。えーっと……『スプーン』とかって言って、すっご

-く重要な場面のPKでも使うんだ!」

「あんなの一生使うシーンないと思ってたけど、お姉ちゃんが全部引きつけてくれ 「ヘーツ!」

てどフリーだったから、狙えたんだ。たぶんもう一生できないよ」 「アハハ、リョータはショーキョクテキだなー。ワールドカップの決勝でアレをや

るんだヨー!」

「ム、ムリムリ、絶対無理だよー」

サッカーの話に、花が咲いた。 いつしか黄金色のスープも、すっかり消えていた。

「ン。ゴチソウサマでした!」「……はー……ごちそうさま」

「そんな、悪いよ。ちゃんと貰ってるし」「ああ、いい、いい。今日はオゴってあげる!」

「お姉ちゃん、お金」

「そのお金でサッカーの雑誌でも買いな」

「オネーチャンこう見えてもお金持ちなんだぞ。車庫にはクルマがいっぱいあ

る!.」

トラクターとかトラックばっかりですけどね。

「ヘーつ・・・・・

マ……お姉ちゃん。家のみんなのこと……思い出さない?」

そう問う彼の目は、ようやく十かそこらになった、こどもの目だった。

「その……寂しく、ないの?」「思い出すよ毎日。ってか週に何度も電話する」

-んー.....

マキは少し、考えた。

「サビシイ」

「やっぱり……」

もね」 「……でも、その寂しさのおかげで、新しいトモダチがたくさんできた。リョ

なことになってない、と思う」 で震えるぐらい本気になって……それ、こっち来たから。向こうでだったら、こん 「それにチームで、サッカー、楽しめてる。みんなと一緒に真剣に練習して、

「そうなんだ」

お茶摘んで、乾燥と発酵と荷出しやって……もちろんそれはそれで楽しかったんだ 「ウン。ウチ、農園だから、たぶん普通にウチのみんなの手伝い、してたと思う。

ろうけど……だから」

マキは少しだけ先輩旅人として、少年に語る。

早かっただけなんだ。だから旅に出たら……その旅を、 「ニンゲンは、いつか旅立たなきゃならない日が来る。 楽しめ」 リョータはそれがちょっと

まるで自分に言い聞かせるように。

-----けど

だが少年にはまだ、勇気がない。いや、準備が、できてない。

カー、教えてくれたんだ。いっつも一緒に練習してくれて、いっつも試合観に来て くれて、いっつも一緒にお弁当食べて……でも、もう観に来て……くれないんだ」 「……僕、お父さんと、離ればなれなのが、さみしいんだ。お父さん、僕に、

ぽたり、と握った拳に雫が落ちた。

わかる。

ゴシゴシ、その艶やかな黒髪を、撫でてやる。わかるがマキは、お姉ちゃんになった。

「リョータ。男の子が、そんなこと言うな」

お父さん死んだぞ」 「ウチのキャプテンなんか、ちっちゃい時に、リョータよりずっとちっちゃい時に、

「コーチだってお母さんもう居ないんだ。お父さんと弟スペイン行って、毎日独り

父さんとお母さんが別居してて、お母さんに月に一回ぐらいしか会えなかった」 「アイも、両親とも遠い外国行ってて、おばあちゃんと暮らしてる。シノブも、 お

「寂しいの、わかるよ。

けど、自分だけが特別寂しいわけじゃ、ないんだ」

「……だけど……」

思わず口を尖らせる。

٥ /

そんなこと言われたって、いまこの寂しさや辛さが、消えてなくなるわけじゃな

「お父さん居なくて一番さみしいのは、お母さんだと思うぞ。男なら、お母さんを

慰めてやれ!」

「……お母さん、お父さんと喧嘩ばっかり、なんだ……」 「あ、あ、そなの? んー……まあ、なんとかしろ!」

フクザツな表情で空の丼の底を見つめる亮太。

まだ早かったのかな。普通にお布団にくるむように慰めるべきだったのか。

オトコノコって、難しい。

「ん。そうしな」

目を伏せたまま、目も合わせず。

「い…さよなら」

マスターが、そっと下げに来る。

「甘やかしすぎだ。ハハッ」「……言い過ぎた、カナ」

男の先輩の言葉にほんのすこし、心が軽くなった。

――狭い部屋のロフトベッドに、ゴロリ。

ってやると言い出したが、断然拒否した。それではまるで遊びに行くようなものじ 「日本へ」と決まった時、 オオジーチャンは大盛り上がりで、豪華マンションを買

と、大見得は切ってみたものの、いざ来て「単身者用」なるワンルーム・マンシ

「納屋?」

やないか……

が、『住めば都』がマキ最近お気に入りの諺。

てそのままだ。いや、ウチのニワトリ小屋の方がここよりおっきいよ!

だって、ウチのはもっと大きい。「ウサギ小屋」というのは比喩でも何でもなく

住み慣れるとこのカプセルみたいな空間が、囲まれてる安心感みたいなものがあ

って、なんとも居心地がいい。繭の中にいるサナギ。

るる……と持ち歩かない携帯電話が鳴った。手を伸ばして取る。

『うん』 「おー、リョータ、じゃないリョー! 『姉さん?』 珍しいね、リョーから」

けだ。 ハニカミ屋で優しい弟は、いつも家族の電話では最後のほうで二言三言交わすだ

た?」 『うん。一応。ベトベトになるね、あれ』 『……週末ね、レースで三位になったんだ』 「おおっ? 表彰台じゃん! やったネ!! シャンパンファイトとか、やっ

「アハハッ!

よおし、次こそ、優勝だな!!」

『……それで、レース止めようと思って』

「へつ?」

『……僕、才能無いよ。』

やないか、まだ若いんだし、ニホンのタクマ・サトーなんて自動車レース始めたの 「いやいや、そんなこと言うなよー。みんな応援してるよ?」まだまだこれからじ

大学生だぜ!!」

まれても、これが精一杯だった』 『知ってる。けど、ダメだよ。僕一生懸命やったけど、運に恵まれてサポートに恵

「いやいや、そんな」

『……勉強して、農園継ぐよ。

だから姉さん、姉さんは好きなようにしてくれていい』

ハッ、とした。

ぼーっと好きなことばっかりやってると思ってた弟が、そんなことを……

んだ。そんなことと、こんなことは、別だろ?」 「バッ、バカ、ナマイキ言ってんじゃないよ。そんなことリョーは考えなくていー

『別じゃないよ。僕がレーサーになったら、姉さんがお婿さん取らないといけない

じゃないか』

「いやいやそーだけどー」

『……ふふっ、それともアテでもあるの?』

居るんだ」 「ああっ、バ、バカにすんなよ、お姉ちゃんだってな、こっちで恋人の一人や二人、

にいりひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひ

۲۱ ۲۱

۲۱ ۲۱

!!!

『ぬわーー

スピーカーホンで家族みんなで聞いてる、ってことをすーっかり忘れてた。 この

声はもちろん……ゴッド・ファーザー亮太郎。御年九○を越えてなお矍鑠。 お気付きの通り、「リョータロー」という音を長男が継ぎ続ける一家で、亮太郎、

『そんな輩が居るなら早う連れてこんかッ!!』

遼太郎、

龍太郎、涼太郎という四代。

『なんじゃ、口から出まかせか……』「いやいやいやいやいや、いやあの、えー」

としたら、嫌われちゃう……」 「いやそんなことないよッ! 居るけど、まだ、そんなんじゃないから、そんなこ

のか? 『そんなもの恋人でもなんでもないじゃろうが。マリアの厚かましさを覚えとらん 『お爺様!! 龍太郎が帰ってきたと思ったら呼んでもおらんのにくっついてきたぞ?』

の父が「引っかかった」と言っていい。 母マリアはこれぞラテンのなんにでもアグレッシブな女性で、まあのんびりもの

『パメラにそんな人がいるなら、おとうさんも見てみたいなぁ』

こんな感じ。

と言ってる場合じゃないから! そう! 今問題は涼太郎のことだよ、そんなこと気にするな、ってオトーサンも やいや、だからね、そのー……えー……い、今は全国大会に向けて、そんなこ

オカーサンも言ってよ!」

『『それが一番しあわせに決まってるだろ』でしょ』 『おとうさんもその方がいいなぁ』 『マアイはそのほうがいいもの』 「ダメだこの夫婦ー!! ムスコ・ムスメのしあわせを考えてよーッ!」

その後も長い時間、喚きあった。

「はあ……」

家 代わって継ぐ。単純な理屈だった。 ネルソン・ピケのようにフェリペ・マッサのようにF1で走る。が、残念なことに それは無理なようだった。だったらもう、やりたいことなんか無い。だから、姉に やりたいことは小さい頃からひとつしかなかった。アイルトン・セナのように、 姉にその役をさせるのか、姉にそれをさせて、お前はなにをするんだ。 の子は外に出ねばならん、と言っても、それは今まで、家を継ぐ男子の話だった。 弟はもう、アタシが留学するって決まった時から考えてたらしい。キシワダ

ほんの少しの、恩返し。『……いつも応援してくれたし……』

男の子はいつの間にか、大きくなっている。 そんな言葉は使わなくても、声の調べから、柔らかく伝わった。

「……バカ……」

て、枕に吸い込まれていった。 電話を切った後、マキは暗くて近い天井を長い間、見つめていた。涙が筋になっ

本当に久しぶりに、帰りたい、と思った。

伝言ゲームは恐ろしい。

最初の話と真逆の話が流通しちゃうなんてこともあたりまえにある。

「……イヤー、昨日の夜電話でさー、こんなことになっちゃってー」

「あはは、そんな嘘つくからだよ~」

「止めといた方がいいわよ、ご家族が本気にしちゃマズイわ」 「ウヒヒ、ダイチの写真でも送っちゃおっかな」

「必要以上に美男子だからね、盛り上がっちゃう」

……これが。

す→古都→三十六。

胡桃→購買で会った千里→可憐→明日葉(ここがポイントだと思われる)→あり

95

「話は全部聞かせてもらいましたア!!」

「「うわぁ」」

ちゃめちゃ嬉しそう。 3年の教室ドアを引き千切らんばかりに叩き開けてご登場は空堀三十六、顔はめ

「なっ、なにどうしたのカラちゃん」

「わかりましたわかってますいやわからいでか、マキやんはワタクシめに全部おま

かせくださればいーんです!

をッ!」 メディのド定番『恋人ごっこ』の脚本を担当できまするこの栄光のル・マンな日々 ああ……この瞬間を私待ってました人生一七年この瞬間そうすなわち!ラヴ・コ

店とかね。その後公園に行くわけですよね、夕方のムード満点の海辺の公園なんか に。そこであなたイチャイチャしてるフリしてるうちになんとなくホントに良い感 は恋人同士をアピールするためにデート行くわけですよええもう一通り。家電量販 「ちょっとー。誰か2年の暇そうなミラクル一座の子連れてきてー」 「まお相手は大地でいいと思いますええツラいいですからねなんといっても。まず

近づく二人の唇と唇……今まさに!くっつこうとした、らそれはなんだか冷たく硬 んに煽られて二人、キスですよキス、キス・シーーーーン!覚悟を決めて目を瞑り 別れ際、『なーんかイマイチ恋人同士って感じがしないんじゃがのー』とか爺ちゃ じになっちゃったりなんかしちゃったりなんかしちゃったりするんですけどこの! お芝居はここまででよいぞ』」 い感触で、そうそれはお爺ちゃんの突き出した杖ッ!『……フォッフォッフォ…… いい瞬間お爺ちゃん寝ちゃってて見てないわけですええもう。んでもって最後は夜

「うん、そこまででいい」

「ちょっ、ちょっと忍様待って、ここはもう少し、もう少し想像力の翼を羽ばたた

くていーってば!」 たかせて、こんなチャンスなかなか無いんで」 「いや、ちょつ、サトル、オオジーチャン来るわけじゃないんで、そんなことしな

なんとか挨拶して孫娘可愛さに錯乱したお爺様が黒服に命じて僕簀巻きにされて拉 「あれっ? 来ないの? じゃ空港で僕が『お初にお目にかかりますお爺様』とか

致されるシーンは?」

「葉っぱ作ってるって」 「ウチヤクザじゃないって! 健全な農家だよ!

「大麻じゃないよ紅茶!」もー、ラテンアメリカってだけですぐマフィアとか言い

出すんだから偏見もいーとこだよ!」

「……呼ばれまして。

三十六とマキさんのマリアージュ・フォトを撮ればいいの?」

「「チガウ」」

こんな短距離短時間でも伝わらないのか。

やってきたのは黒々としたフラッグシップ・デジタル一眼も頼もしい、キャメラ

マン匠。

「エー、いいよう、そんな本格的にウソになっちゃうじゃん」 「あっ、でもニセ恋人写真、撮ってもらったら?」

「だってもうウソついてるじゃん」

「ンー……どうせ撮るならダイチがいいなぁ」「では、不肖ワタクシメがお相手をば」

撮りたいわけやないですけどもー。なんか寂しいわー」 「えーつ? いーじゃないですかどうせウソなんだからー、 って別にマキちゃんと

「変な写真てなんですのん、ますますへこみますやんか。だって、ねえ、みなさん、 「だって長く残るんだよ写真って。変な写真撮ったらあとで後悔するヨー!」

どうせ『ごっこ』なら、誰でもいいですよ、ねえ?」

もあるからな、滅多なことはできん」 「大ちゃんがいい!」「上町君の方が」「コーチ」「『嘘から出た真』という言葉

「あ・れー?」

「というか、空堀君だってナナちゃん以外と例えば恋人ごっこするとして、私とだ

とイヤでしょ?」

「ユミ姉さんと? ……いや、イケ、ますよ」

「なにその間」

「千里となら?」

「………いや、だいじょぶです、ぼくああいうの、 わりと」

「明日葉。」

「すみません、僕が間違ってました。たとえ嘘といっても、ついていい嘘と悪い嘘

がありますね」

「三十六、明日葉ちゃんとなら結構似合ってると思うよ、和風の顔立ちで」 「止めて止めて、止めて」

のだ。が、それはまた別の話。 最近西九条家行くとやたら足止めされる。ご老公に気に入られすぎるのも考えも

を物陰から匠が激写する、という段取りに。 −で結局、三十六が大地をおびき出して、 マキと楽しく語らい合ってるところ

「……あ、マキさん」

「あーダイチいいところにー! あのね、ちょっと相談があるんだけどー」

「はい、なんでしょう」

カーやってて、このへんでそのぐらいの子がサッカーやるってなると、どんなとこ 「一○歳ぐらいの男の子と知り合ったんだけどね、引っ越してきたばかりの。サッ

ろがいいのかなー」

ら地元の少年団かな……」 「ああ、あー……本気でやるならクラブのジュニアですけど、そこまでじゃないな

「ウンウン」

「……どう、どう?」

「いいかんじで撮れてる。……ただこれじゃ友達同士とあんまり区別付かないかな

「確かに……いやまあ実際そやしなぁ……うーん、後ろからビックリさせて抱き合

わせたりすっか!」

「そんな都合よくいくのかなぁ」 「……ボーイズ?」

「「ヒッ!」」

我らがキャプテン・長居ー美緒。 思わずカメラを後ろ手に、直立不動キオツケの二人。もちろん後ろに現れたのは、

「なんの悪だくみをなされておられるの・やら」

「いやっ、あのっ、そのっ、これはっ」

「三十六、ここは、ここは小細工小嘘小冗談無しで、本当のことを、真実を」

「いや、いやそやけどこれ、嫁はんの前で浮気写真撮ってるようなもんやぞ?」

「んん~? なにやら聞き捨てなりませぬな」

「キャプテン、実はですね……」「はいっ!」いや、あの」

が無難なもので、そのへん手馴れたもの。 匠が簡潔に状況を説明した。最近、街角で写真一枚撮るのにも一々許可取った方

「……なんだ、そんなことなら協力惜しみませんよ私だって鬼じゃないんだから。

『嘘』だし」

「はい、もう、嘘でございます嘘でございます」

「要はすっごくニッコリとかぺったりくっついたりとか、そういう写真だよね」

「そうなるね。できれば腕組んでたりとか、そんな感じが」 「まかせなさい。キャメラ、構えて」

「あっ、はい!」

「……大地くーん」

手振りで状況を説明する。 美緒が声を掛けた。ハッ、 と一瞬驚くマキに素早くウィンク、陰の二人も身振り

「ぺるーしき?」てみたいなーと思ってー」「あのね、ちょうどマキちゃん居るから、「あ、美緒、なに?」

いま流行りのペルー式サンドイッチをし

「はいマキちゃんそっち腕持って」

左腕をそのように。 言いつつ美緒は大地の右腕に自らの左腕をガッチリ絡める。慌ててマキも大地の

「せーの、サンドイッチ・サンドイッチ・ヤッホー・ヤッホ 「あ……さんどいっちさんどいっち・やっほー・やっほー」

押しくらまんじゅうの要領で、両サイドから挟み込む、挟み込む。

ッ! 「もっと元気よく! サンドイッチ・サンドイッチ・マチュピーチュ・チチカカ湖

「えっ、ちょっ、なに、これ、ちょっ」 「さんどいっちさんどいっちまちゅぴーちゅちちかかこっ!!」

「ナースカ! クースコ! リャーマ! アルッパカ!」

「えつ、えつ、えつ」「アハハハハハハハーッ!」

コしちゃう、大地も困りながらも変な歌に思わず笑う。 もはや腕にしがみつくようにしてグイグイ押し上げる、 なんだか楽しくてニコニ

「……鬼や……あれを鬼と言わずしてなんという……」

「しゃべってんとしっかり撮りや! ちゃんと撮れてなかったら後怖いで!」 「勝利条件を満たしながら自分の欲望も満たすなんて……あの人はカエサルか」

「タクミ&J1をナメるなーーー!」

カシャカシャカシャカシャカシャカシャカシャ……

「は、はぁ……これどこで流行ってるの?」 「……ふぅ。今日はこんなもんで。じゃ、大地くん、ありがと。またね」

ポンポンポン。

マキは、笑いを堪え切れない。美緒は自分のハートを叩いた。

「じゃ、じゃあダイチ、アタシも行くね。参考になりまチタ。ププッ」 「あ、はい、何も知らなくてごめんなさい」

「……さんどいっちさんどいっ……ぶっ」

「どう? どう?」 しれっ、と拠点に戻ってきた美緒、ニコニコしながら、

背面液晶で写真を送る。「バッチリ撮れました!」見てくださいこれ!」

完璧なショットが、次々と連なる。これで衣装がタキシードとウェディングドレス れを見つめている、構図角度レイアウトもちろんピント・ボケなど問うまでもない なら、結婚式の写真といっても誰も疑わないだろう。 さすが匠、マキがこれ以上無い笑顔で大地の腕にすがりつき、大地も微笑んでそ

か、

鬼の笑顔は見る見る曇って、鬼になる。

「はいっ!」「……駒川君」

「は。あ、あのー、どこかお気に召しませんでしたでしょうか」 「君は……アーティストかも知れないけど、プロフェッ・ショナルではないね」

「私写って無いじゃない」

「あ! いやでも、これは撮影意図的には」

「あっ……ああっ !? 」「三人を・撮って・トリミング!」

キ」の写真の副産物として「美緒・大地」の写真も発生する! てつまり「美緒 あまりの技術がむしろ災禍を招いた。匠ほどの腕でなければ確かに、三人まとめ しかも腕組んでニッコーな恋人写真。似非だけど。 ・大地・マキ」と撮らざるを得ず、そうすればそこから「大地・マ

「馬鹿者ー! だから、俺は、あれほどしっかり撮れと!」 「もっ、申し訳ございませんっ!」

「ばかものはむしろあなたです、空堀君」

のではないのですか? 違いますか?」 「あなた、あなたがこの兵を使う士官でしょう? 「ハイッ!?」 監督の指示に、カメラが応える

「はっ、はいっ! まっ、まったくおっしゃるとおりでございまするでございます

日々まけまけ、青重けるよう「修業が足りません。「「はいっ!」」

「二人とも……」

「ふふっ……じょうだんだよ」「もうしわけありませんでしたっ !! 」」日々ますます、精進するように」

たぶんまったく笑ってない。目、見えないぐらい細いです。

スタスタとまた背筋伸ばして去る女傑を直立不動で見送って、二人。

「三十六……」 「何を言う匠。意図を見抜けなかった俺の未熟や。お前は一ミリも悪くない」「……三十六。僕が悪かった。おのれの腕に溺れてた」

道は、どんな道も、遠い。

「「うわ~~~~~~~~~ん……」」「匠……」

ってランチ・パーティが企画された。プロデューサー発案で場所は我らが上町邸。 週末土曜日、地方予選突破に向けて決起集会……というと大げさだが全員揃

「はっぱ、なんかおかしいそれ」「外国人幼な妻みたいですー!」「外国人幼な妻みたいですー!」「かあ、エレちゃん可愛いねそのエプロン~!」「こんちわ~!」「チーッス!」

さすがに参加二〇人を超えるとさしもの美緒シェフの手にも余るもので、エレ、

三々五々集まるチームメイツ。忍がアシストしてお料理当番。

「……オーウ来たぜ! ガハハ、これ差し入れ!」

「オウ哲っちゃん来てくれた? 入って入って」

でくれ」 「アホウ、タカちゃんひょっとしたら明日の試合が最後かもしれんから今日楽しん 「いいの、ボクも来ちゃっても?」

「そんなー! チームと縁切れるみたいな言い方しないでよー!」

「太陽はやっぱ忙しいの?」

ーの千林哲哉と、放送部にしてスタジアムアナの高安和輝。地方予選でも最後の二 つはスタアナ持ち込みが微妙で、そんな話をした。 「いまクアラルンプールかなんかに居るわ。メールしたらめっちゃ悔しがってた」 男性陣は大地・三十六に加えてもちろん匠、それから援団副団にしてサポリーダ

「うひょー、シェフに伝えますー!」 「ウチの。パッケージしてないから見た目悪いけど、味はイイヨ!」 「おっ、なんですのんマキやんこれ、お茶?」 「……チワーッ! あ、サトル、これオミヤゲ」

キロは入ってそうなビニール袋。これは呑みでがある。

「……うわっ、これ全部用意してくれたの?」

がエレちゃ〜ん。そして握りと手巻き寿司の用意がキャプテン、で〜す!」 「もっちろ〜ん。お稲荷さんと海苔巻きがわたしー。関西風具だくさんちらし寿司

ければ美緒が手の掛かる巻や稲荷をまかせるはずもない。 ピシッと和装に髪アップ、襷掛けも凛々しい忍様。口調は軽いが腕は確か、

「誰かもも先輩にアイマスクかぶせろー!」「ああんもう待ち切れない!」いただきまー」

能に訴える点もさることながら、カラフルで見てるだけで楽しくなる点も、だろう。 本日のメニューはお寿司づくし。お寿司が日本人に好まれるのは魚+米という本 ももなどもう乾燥よけに掛けてあるラップごと飲み込まん勢いだ。

全員揃ったところでお茶お水ジュース各自好きなものが配られて……司会は

高安。

早く食べたいですよ・ねー!」「はい、では皆様本日は以下略、

あ、はい」 「では我らが指揮官上町大地様からご挨拶と乾杯の音頭だけ」 「はーい!」」

ニコニコ顔がびっしり並んでいる。大地はぐるり一周、見回した。

ほんの数カ月前、僕はこの部屋で独り、試合を観に行こうか行くまいかうじうじ

うじうじ悩んでた。それが…… あの一歩、出すか出さないかで、こんなにも人生が変わるなんて。

「……もうなにも、言うことないです」 ……笑った。

「ええ~……?」」 「……だから、いつもの円陣で」 「……おー!!」」

さすが我らがリーダー、って感じ。

「音頭は、せっかくですからサポリーダー、スタアナ、カメラさん、それからみん

「……ネヴァー・ギブアップ!」な。……どうぞ!」 「Go Ahead!」 野太い声が闘志を掻き立て、

「……あんど・どう……」 エエ声が気分を高揚させ、

「「ミラクルズ!!」」 落ち着いた声の促しに、 みんなで応える。

杯を乾かす。

113

拍手が起きた。

「……さあ戦争じゃーーーー!

「おおーーーーっ!」」

:

……この勢いでボール奪いに行ってくれたらなぁ……」

「「わははははははは……」」

冗談ではなく天然で漏れた指揮官の呟きに、笑いが木霊した。

無くなり、ちらしもほぼ同時に桶の底を見せた。手巻き寿司もすし飯海苔具材が見 数分ももたず大皿の握りが消え、 山と積まれてたはずの助六が綺麗サッパリ

る見る消えていく。

が、もちろんシェフにとっては想定内で、

「は〜い第二セットはパーティオードブル〜」

「わぁお!!」

でまくったりチンしまくったりしました、ええ。 揚げ物メインの腹にたまるモロモロを。これは楽して売り物を揚げまくったり茹

「……先にこれ食べてもらった方が良かったかもねぇ。あんなに時間と手間掛けて

作ったのに、いっしゅ~ん」

「ふふっ、でも、キレイに無くなって、ホッとしまシた!」

です」 「『一番最初に一番美味しいものを』が鉄則ですよ~ん。足りないぐらいでいーん

と言いつつ美緒、スープ皿を手にキッチンから現れた。

「……マキちゃん。これ。スペシャルメニュー」

「エッ?

.....ア!!! J

フェジョアーダ。ブラジル名物、黒豆と豚肉の煮物。

「こっ、これはダメなの!!」 「見よう見まねなので、お口に合うかどうか、だけど」

瞬目を輝かせたマキが、その目をぎゅっと瞑って首をブルブル振った。

たから!」 「へつ?」 「アタシ、こっち来る時、これ、これだけはブラジル帰るまで食べない、って誓っ

「……まっ、待って! それは悪いことをしました。じゃあ下げます」

それ、捨てちゃう!?」

「あら。

「ううん、冷凍してまた後日。まさかそんな故があったら、みんなでいただくわけ

ナア? だって、作りたてのほうが絶対美味しいヨ!」 にもいきませんし」 「いや、いや、そんな、そんなもったいないことは、しない方がいいんじゃないか 「もちろんそうですけど」

「マーキーちゃーん。

ムリしないで。ひとくちだけいただいちゃいなさいよ~~~」

ももが悪魔のささやき。

「ダッ、ダメなの! あのね! オオジーチャンがね! ニホンを出る時、 ヨコハ

マでおソバ、食べて!

『一旗上げて日本へ帰るまで、ソバは食わん!』

と誓って、で、農園ができたの!

だから!」

「あら~、ゲンの良い誓いなんだね~。

で、マッキーは何を誓ったの」

「……ハ?」

「……あ、イヤ……アレ?」 「おじいちゃんは一旗あげることを賭けたわけでしょう。マキは何を賭けてるの」

「なにより私が食べてみたいからそれちょーだいキャプテン! ね、ユーミ!」

「ええ、もちろん私も。ね、くー」

「食べない理由がない。プリーズ」

「はいはい、もういいから食べちゃえ。美緒ちゃんわざわざ食材専門店行ってむこ

うの燻製ソーセージとか仕入れてきたんだぞ」

忍が美緒の下げかけた皿を目の前に突き出した。

ふんわり香る煮物の香りは、懐かしいアレ。

無意識がスプーンを取らせ、手が自動で一口分を口に運んだ。 目に映る茶色黒いゴツゴツした感じは、いつも食べてたソレ。

固まった。

ぶわつ、と目に水が溜まった。

もう一口。

「……ボフッ!」

回噴いた。でも、ボタボタボタ……と涙を零しながら、手が止まらなく、なっ

ガシャガシャ、ガシャガシャ。

塩っけが足りなかった。それは涙が補ってくれた。

いや、美味いかまずいかなんて、どうでもよかった。今食べているのは、ふるさ

とだから。

キの写真の種明かしでゲラゲラ笑って、また持ち寄りのケーキとお菓子をパクつい たて、最後は沖縄民謡でみんなで輪になって踊った。 紅茶とお茶と珈琲でおしゃべりして、自分達のビデオ観て盛り上がって、マ

ちゃらんぽらん・イズ・ミラクルズ。

転させながら、大きな器は手洗いで。 夕刻いい頃合い、会はお開きに。後片付けに残る美緒。 手際良く食洗機をフル回

と、なにやら思案げである。 一段落して、渋めのお茶を淹れた。 旦那にも。

・・・・・どうしました?」

明日。カテナチオで有名らしい」

「また~。せめておひさまが沈むまではお仕事のことは考えめさるな~」

119

「あはは、ごめん」

笑顔で茶をすすり、あー、とため息。

まもちろん美緒としては、二人になった途端通常モードに入るのは、 嬉しいんで

う意味。

すけどね?

「カテナチオ」は堅固な守備で鳴らすイタリア代表の代名詞、

「鍵をかける」

ع درا

自分もお湯呑で両手を温めつつ、

「いや引いて守られるとスペース無いからね。基本スピードタイプは使いづらい」 「ソウル・フードで元気を出したマキちゃんでも使って掻き回しますか?」

「そうそう、美緒に聞こうと思ってたんだ。マキさ、FWとして使った方がいい? 「冷徹ですこと」

MFとして使ったほうがいい?」

ー は ?

「いや今のままだと中途半端だな、と思って。どっちが向いてるんだろう?」 「向いてるも何も……それをあなたが決めずに、誰が決めるんですか」

「·····あ」

そう言われりゃ、そうだ。

適性とか個性とか考えすぎてて、もう一面の基本を忘れていた。

「マキちゃんは素直な人だから、使いたいところで使って、こうしろ!って言えば

いいと思う」

「……かな。

なんだ、簡単なことだな」

「そうですよ、たいていのことは簡単なことです」

と、美緒独特の無根拠に得意げな表情をして、エプロンを巻いた。

「……ふふっ。じゃあ、帰ります」

「送るよ」

「あっ、いいよいいよ、まだ外明るいし……甘えちゃおっかな」

Ĺ

121

二人で、外へ出る。空気が冷たくて新鮮で、きもちいい。

「……ねえねえ、なにが一番おいしかった?」

「……これ言うと怒られるかもしれないけど、フェジョアーダ」

「うん。もっとしつこいかなと思ったら全然大丈夫だった。いくらでも食べられる 「いやっ! よかったでしょあれ!」

「本物は豚のしっぽとか耳とか入れるらしいんだけど、安全にバラやソーセージで

いったのが功を奏した感じ」

「ヘーつ。あソーセージ美味しかった。野趣があって」 「でしょう! あれ、でも大地くん煮物あんまりじゃなかった?」

「そお?」

「肉じゃがとか筑前煮とか反応悪いよいつも」

「んー……」

母さんのと違うからじゃないかな、ってセルフ分析結果は、さしもの大地くんも

握り潰した。

「よぅし今度はペルー料理に挑戦してみよっかな!」

「ん、ペルーって、どんなの?」

とかもあるの!」 うんだって。スペイン風で、豊かな食材を使ってー、そう、牛のハツのね、串焼き「セビッチェって魚のマリネサラダとか。いま注目なんだよ、日本人の味覚にも合

「へえーつ。それも美味しそう。 あ、それでペルー式サンドイッチとか言ってたのかー」

「ななななな」

影がずいぶん長くなる季節に、なってきた。

ーから!」 「……カンザキが悪いんだぞ! 『球技場はこっちです!』とか自信たっぷりにゆ

「そ、そういうけど!」 「だっ、だって第一第二第三って三つもあるとは知らなかったんだよー!」 「しかも第一の次第三行って第二でしたってどんだけ無駄足なんだよ!」

「けどま、時間とか調べてくれたのカンザキだから。急ごう」 「やっぱマッツンは優しいなあ! そもそもマキさんが悪いんだよマルタマコーエ

ン!とだけしか言わないからブツブツ……」

自転車を駆る少年たちの前に、歓声が聞こえてきた。

あった。鍵を掛けるのももどかしく、少年たちは観客席への長いスロープを駆け上 第二球技場の入り口には立て看板に「クイーンズカップ地方予選 入場無料」と

が っていく。

予選は、 正念場を迎えていた。ここを抜けば、 「全国」 が見えてくる。

古都は、ビビっている。

ん前へ、斜めへ遠くなっていく。それも、明らかに怒っているのだ。 いつもはベンチ前すぐに立つ上町コーチが、今日はのめり込んでいるのかだんだ

敵が、 理 由 は簡単で、古都にもわかる。 攻めて来ない。

をウリにするだけあって、確かに守りは抜群に巧かった。最近には珍しいるバック ە ر ۱ いとマークの受け渡しなどがやりにくく逆に守りにくい面もあるのだが、かなり巧 に両ウィングバックもべったり下がっていわば5バック、5バックはやり慣れてな 相 手は元実業団が廃止に伴ってクラブになった伝統あるチーム、「カテナチオ」

特

に危険なFW可憐とMFナナには運動量豊富なマーカーをガッチリ張り付け、

125

自由を奪う。

二人とも若年層では有名人であり、元実業団ならそういう情報もよく集めている それはいい。

だろう。相手の強みを潰すのは兵法の理に適う。

だが攻めて来ないとはどういうことか。

運んでゴールを狙う。ところが眼前の彼女らは、まるでそれが目的かのようにボー ルを奪いに走り、奪ってしまえばまるで満ち足りたかのようにスロー・ダウンする。 サッカーでは、守備は攻撃のためにやるものだ。守備でボールを奪って、それを

『……なんだこのチーム……』

たとえば鋭い殺人カウンターに繋がっていたり、全員守備から一斉に全員攻撃に移 るような雄々しい戦いに結びついているなら、まだよかった。 上町大地は元々、守備的なチームがあまり好きではない。が、それでもそれが、

堅守が伝統」などと言ってるうちに、手段が目的化してしまったのだろう。 れに繋がるパスを送る楽しさを、忘れているかのようだ。おそらく「我がチームは しかしここはまるで、本来の目的、そうゴールを奪う喜びを、シュートを撃ちそ

るで無い。 リスクも取らない。だからハラハラもドキドキも無く、ゆえに楽しさも面白さもま 守備に走る彼女達は確かに真剣で必死だ。だがそこには、チャレンジも無ければ

『……というか、彼女達自身が攻めたくならないのか……』

ウチの連中なんてDFだって守るのソコソコに前へ前へ行きたがる。攻撃のセット それが、サッカー選手ってものだろう。 大地が最も不可思議に思ったのは、彼女達自身がそれを受け入れていることだ。 ーでは長身を理由にCB(センターバック)二人がいつもゴール前へ走る。

『・・・・わからん』

の元気な、挑戦的な、 大地は考えるのを止めた。とにかく僕は、僕達は、こんなチームに倒された、 積極的な、楽しい、そして美しいチーム達の、仇を取るまで 他

127

『……なにがなんでも、勝つ!!』

強すぎる意思が、キツイ眼光となってピッチに注がれる。

マキさん、ユミ姉さん、はなこさん、愛さん、ちーちゃん。 古都はあまりコーチ見てると怖くなってきたので、ベンチに目をやった。隣から、

みんな真剣に観てるが、コーチほど怖い顔ではない。聞いてみた。

「……どうでしょう、はなこさん」

「……んーまり強くはないわね、このままやってりゃ、勝てるんじゃない? 姉さ

٨

「ええ。時間の問題だと思うけど」

あら。意外に選手たちは、落ち着いていた。

「……ただ、どう切り崩すか物理的に手がちょっと……」

ユートコースかなり切ってる」 いから胡桃が死んでて、あれだけ密集してるとさすがのありすも動き取れない、せ 「そこ、巧いのよ。こう、前後の選手がうまく重ならないように配置されてて、シ 「ですね。ナナ押さえられて前スペース無いから流乃も走れない。クロス上がらな ぜいキャプテン、エレ、蘭の撃ちっぱなしミドルぐらいしか」

「くっだんねー練習してねーでもっと攻める練習しろっつーんですよね!」 どちらかというと普段フリーダムな守備で大変な目をみてるはずの千里までがそ

んな言葉を吐いた。

がけてムリヤリ・クロス。 はさすがナナ、 ……ナナがボールを持った。敵DFから逃れてズルズル陣地を下げる、が、そこ 自軍ゴールに向け逆走しながら、左足を二七○度振り抜いて胡桃め

らせ、自由を奪う。胡桃もなんとか頭で触れるが、ボールは明後日へ飛んでいった。 胡桃、飛ぶ。しかし相手最長身選手がこれだけは、という気迫で身体をのしかか

あー、と何度目かわからないため息がベンチを覆う。

−0が相手のペースであることは間違いないので、どこかで断ち切りたい

わね。ま、コーチが魔法の杖をふるってくれるでしょう」 「ようし、久しぶりにオレッチがFWを!」

「ふぉわーどー」

千里の叫びを本職・愛が非難した。

「ふふっ、前線増やせばいいってもんじゃないわよ。むしろ私がエレあたりと替え

てもらって、かき回す!」

「4バックも要らないかも。もーさんと私と替えてもらって、蘭を前に突っ込ませ

3

ってください!」 「あ、ハナさんがスイーパーやるならあっしがGKやりまっす! 「忍様ヒマそうだし、意外に悪い案じゃないわね……」 前へガツガツ行

「でしょ? でがしょ?」

かしましく好きなこと井戸端論議ってる中で、古都はおや?と思う。 いつもなら

「アタシアタシー!」なマキが、 黙ったまま顔をしかめて真剣に見入っている。

お腹でも痛いのかな?

……マキは、まだ悩んでいた。

ばないアタシなら、もっと完璧に抑えられているだろう。 自分があそこにいたとして、なにができるか。 ナナはマークを振り払おうと、あらゆる手いや脚を使っている。 技術では到底及

人使いのヘタな自分では、ああいう真似はできまい。

カレンはちょこまかとポジションを変え、ボールに触っては局面打破を試みる。

なった。もちろんその蛮勇も、時に必要なものだと思うが。 湧き出るキモチだけを根拠に喚き散らしていた今までの自分が、少し恥ずかしく なにができる、という自信が無い以上、「出せ」とは到底言えなかった。

おそらく相手の、Thinking Pot。——前半終了、0-0。

前半が終わった。

あの人が、引き上げる。

「……マキさん!!」

物思いに耽っていたような硬い顔が、ぱあっ、と明るくなった。

「よく来たネ!」

「いえつ」「これからですよ!」「きたとこー」 「アハハッ、ちょーっと手こずってるさー! ゴメンネおもしろくなくてー!」 見上げれば、あの連中が、鈴生りになっている。照れて、笑った。

「マキさん……」

なんて言葉を掛けたらいいんだろう。

考えるまでもない。いつも、チームメイトには、こう言ってた。

「オウサ!!」 「……がんばって!!」

ニッコリ笑って、拳をくれた。

空中でグータッチを、当てる。 さらに笑顔をくしゃくしゃにして、ロッカーへの通路を走っていった。

『……おねえちゃん……』

そう呼べばよかったかな、と少年は思った。 いや正確に言うと、そう呼びたかった。

――ロッカールーム、着替え終わり、コーチを呼んだ。

入ってくるコーチを見て、古都は驚いた。

ニコニコ、してる。

見回しながら、声も優しい。「……みんなもわかっていると思うけど」

注意は三点、あります」「強い敵じゃないね。

「ひとつめ。焦らないこと。まだ半分ある。向こうのペースにのせられないよう 「「はいつ」」

「「はいつ!」」

「「はいつ!」」 「ふたつめ。警戒を緩めない。攻めてこないのは相手の作戦かもしれない」

134

みっつめ。いつもどおりで。変わったことは、しなくていいです」

「よぉおおおし……「「はいっ!」」

「「おおーーーーーーーーっ!」」勝つぞ!」

拳を握ったりしつつピッチへ向かう。 雰囲気と並ぶ表情が、パーッと明るくなった。 各自気合十分で身体を震わせたり

『……まあお上手になったこと。』

にものすっごく煮えくり返っているのだろうが、そういう個人的感情をぐっと仕舞 いこんで、今なす事を具体的に伝えていた。 と、感心するマネージャー。きっと、腹の中では不必要にディフェンシブな相手

これ試合によって使い分けてるのかしら?

確かに、イライラさせる相手には、こっちがイライラしては絶対にいけない。 力

ちょっと前までは溢れる自分の感情を伝染させるのが得意だったのに……って、

135

スタマーサポートでも鉄則である。

そして古都、自分の気持ちもずいぶん軽くなってることに、気がついた。

そうか。

みんないつも、不安なんだ。

てくるのだろう。 だから「大丈夫」の声が聞きたいのだろう。そう言ってもらえると、勇気が戻っ

たせるには、並大抵のことではない気もする。

リーダーというのはそれだけのことかもしれないし、だがその言葉に説得力をも

今だって、ここまで連れてきてくれた上町コーチの言だからこそ、超あったりま

えの注意が、重く響く。

「コーチって、大変だよね……」

「わ、マキさん」

「そ、そうですね。ビックリしました」 「ダイチ、あんなにプリプリしてたのにカチッと切り替えて……スゴイよ」

「……でも、オモシロそう」

「ふふつ。そうですね!」 マキさんがそんなこと言うとは意外だった、が、ひょっとすると農園主というリ

ーダーである曽祖父の血が、流れてるのかもしれない。

古都は定位置、大地の横に、マキは他のサブメンバーと共に軽いアップに向かう。

同じ戸締り用心火の用心作戦を繰り返してきた。 後半もまったく同じ。監督に「よくやってる」と褒められでもしたのだろう

穴に針金を突っ込んだり、ドアに体当たりしてみたり。しかし、耐えるというより 反応がない。まるでベルリンの壁に卵を投げつけているようである。 こちらはなんとかそれをこじ開けようとバールのようなものを差し込んだり、 鍵

その時、表情はすでに平静に戻っていたコーチ、が、くるっ、と振り返った。 一三分経過。残り三○分ちょい、手を打つならそろそろ……と古都が思い始めた

「明日葉。右サイドバック」「交代はどなたですか?」「ハイッ!」

「「ええつ!?」」

全員から声が上がった。古都も。

かまわず立ち上がったマキの両肩に両手を置いて、そんなの、一度もやったこと……

顔を近づける。

士務は『囮』だ」いいかよく聞け。

「ナナと頭繁こ前後のポゾン「ハイ」

「ナナと頻繁に前後のポジションを変えて、右の前めで暴れて敵の注意を引きつけ

ろ。その隙にフリーになったナナに仕事をさせる。

ト撃て。いいな」 「リョーカイッ!!」 ゴールの可能性はどうでもいい、できるだけ派手にドリってクロス上げてシュー

ポンポン、と頬を叩いて、お尻を、パーン!

「Dance! Maki!」

マキ、走りながら叩かれた頬とお尻を自分でもパンパン叩いて気合いを入れる。

役割がハッキリしてる。やりやすい。

交代札が上がった。スタアナが、ドヤ声で期待を煽る。

『選手の交代をお知らせします。

17番西九条明日葉に代わりましてマキ・パメラ・キシワダ、 背番号丨

「キターーーーッ!!」

10 足す9 (テン・プラス・ナイン) !!』

「試合動くぞ、マキやんコーーーール!!」

「「おう!!」」

リーダーの音頭に、サポが一斉に呼応する。 「糸巻きの歌」と仕草とともに、

踊って 撃って パメラ!!

燃えろ 走れ パメラ!! マーキーマキマキ

しくなってくる。相手の何倍ものサポが居る理由が、わかってきた。 少年たちも見よう見まねでぐるぐる腕を巻いた。緊迫の場面なのに、どうにも楽

マキ、大声援に送られてピッチに駆け込む。

送り出す。明日葉が急ぎ足で帰ってくる、ちょっと硬い顔の明日葉、を、両腕でぎ ゅつ、と抱き寄せる。 大地、ナナの名を叫んで手招くと、肩を組んで意を伝える。しきりに頷くナナ。

驚く明日葉、の耳元に唇を寄せて、

「いっ、いいえ!」いいえ!」「……戦術上しょうがないんだ。ごめんね、明日葉」

息と喘ぎ声の中間みたいなの吐いて、椅子にうつ伏せとろりメルティング・チーズ。 ポワポワした顔でフラフラとベンチに戻ってくる明日葉ちゃん。はひ~、 とため

「……もー、なにやってんだか」

「イヤラシイ……」

「はっぱ、気をしっかり持て、はっぱ! 一等最初に落とされた事実は変わらない

ぞ!」

「ちょっと聞いてくださいよこないだね、 『マキさんサイドバックどうですか』っ

て聞いたら完全否定だったんですよ?」

「できる男ってのはそういうものよ、人のアイデアをまるで自分の発案のように使

「いろんな意味でひどいわ……」

いこなす」

が、現実というものは、たいてい「ひどいヤツ」が動かしていくものである。

ナナを追い越すオーバーラップを掛ける。ナナも積極的にそれを使う。 守備重視、鉄板で右自陣に立ち塞がっていた明日葉と違って、マキはガツガツと

「踊れ」と言われて燃えないブラジル娘は居ない。 サポートを得、ゴールの重圧か

たことないほど大胆にトリッキーに。小刻みにあるいは大きくステップ、激しく不 規則な腰の回転、 らも解放され、自由自在にボールを操る。右へ左へ前へ後ろへ、チームメイトも見 相手とボールが翻弄される様はまさにサンバ。

そして今日のマキは、積極性最高。

「「うおおおおおおおおおおおおぉぉぉ……」」ドギャァアアアアアアアアアアアン……

「「いっけーーーー!」」

放つ。 相手をかわし、サポがここぞ!と思った瞬間、 右脚を高く振り抜いてシュートを

清々しい。盛り上がる、ノッてくる。

これがまた最っ高にパワフルで、不規則にブレつつゴールを襲う。

外れはしても

シュート撃て撃てと指導者がクドクド言うはずである。

「ウィ!」 「ほいさ、マーさん!」

自身もドリブル得意なナナとの相性は抜群。持ちすぎて囲まれればナナに返し、 かと思えば、軽やなパス交換と共に、右サイドを攻め上がる。

ナナも煮詰まればマキに預けた。

作戦や技術だからって、劣っているとは限らない。他の使い勝手がいいから使わな くなっただけ、のこともある。 そういえば去年はこのコンビで、右サイドをズタズタにしたものだ。忘れられた

えば左へ、移っていった。 当然、相手の目も注意もぐいぐい引きつけられる、 一気に重心が右へ、敵から言

その傾きを見逃さぬキャプテンではない。

「ナナッ!」

「おう!」

や左サイド最奥めがけて思い切り蹴っ飛ばす。 鋭く正確なパスが、ナナから飛ぶ。センターサークル付近。 美緒、 それを受ける

でそれを捉えて……だが一瞬、 きょうはどうにも暇だった流乃、余った脚を全部使って、コーナーフラッグ付近 胡桃についてる長身マーカーを思い出す。このまま

素直に上げても、無理目。

切り返し、右に持ち替えて、

それは可憐、相手GK、胡桃をはるかに越えて、右タッチ奥、に待ち構えていた、 クロス!

脚で何度も何度もフェイントを入れ、身体を張り、ボールを捏ねる。 ワーッ、と殺到する敵DF、そのたくさんの脚を薙ぎ払うかのようにまた、 長い

右奥からゴールに、ゴールに、にじり寄る。

CBまでもがそれを潰さんと向かったその瞬間、

「ハアッ!」

呼気一発、大きく鋭いグラウンダーが、 、と敵味方が見送ったその先には、 自陣向かって逆走していく。

ナナ、どフリー。

「……うおりゃっしゃーーーーーーーーつ!!」

変な声挙げてワンタッチ、必殺の右脚が振り抜かれた。狙うは。

で全て迎撃していた胡桃付対空DF、 地面を走る相手すべてを無視していいと言われ、 離陸する胡桃にへばりついて離れない。 実際ナナからのクロスをここま

ちがう!

が、目が追うボールに、違和感。

基本通り、一回消えて、 高空でグイ、と曲がったボールが、エース・ストライカーの足元めがけて降り注 DFの前に出てきた、 可憐。

「……チェス!!」

格の違いを魅せつける、ダイレクト・ヴォレー。ドン! 1点。

146

はマキの元に走った。偶然か必然か、ナナもマキの元。なんといっても今のは、 キのガンバリが切り開いたチャンス。 歓声がスタジアムを包む。いつものジャンプガッツ・パフォーマンスの後、可憐

マキを中心に三人で肩を組んで、笑いながら走る。

マキが客席を指さすと、ナナも可憐もそれにならった。 サポが拍手と歓声で応え

る。

「こういうことなのよね……ナナのスーパークロスと可憐のスーパーヴォレーのは 「……さーくせん・どーんぴしゃりー!」

ずなのに」

「誰が見ても今のは、マキさんとこで勝負あり、なんですよねぇ」 「サッカーって、おもしろい」

感嘆しきりのベンチに、コーチが帰ってくる。先制して一息かな、 と思いきや、

「あっ、はいっ! どこ?」「ユミ姉、いくぜ」

右サイドバック。

交代は胡桃。マキをトップに上げて2トップ」

「カウンター狙いね。了解、守り倒します」 と言ってガードグラスを掛けると、

とグラスの鼻頭持って下げられる。そしてウインク一つ、

「たぶんむこう、出てこない。オーバーラップもバンバンやってくれ。このまま…

:叩き潰せ!」

「……ハイッ!」

グラスを元に戻して、ポン!と両肩を叩いた。そのままタッチラインまで送る。

そして、

「マキーーーーッ!」

叫ぶ。振り返る。トップに入れ、と指を振ったあと、

「ハーーーーーーーッ!」 大声を出して、正拳突き。

なにごとだ、と目を丸くするチーム、

だけどマキには、それで伝わった。

ーーーッ!!」

同じように右拳を前に突き出すと、全力疾走で可憐に並ぶ敵陣深くに走った。

……戻ってきた胡桃と音立ててハイタッチ、胡桃、 その指を離さない。

「・・・・なに、いまの」

「ゴールしろ、って言ったの」 「それなら私でもできる」

「きょうはサンバの聖人の日なんだ。ブラジルっ娘使わきゃもったいないだろ?」

……ベンチ。

「なんてなんて?」なんて言われたの?」

「・・・・・一言いくるめられた」

『本当は愛してる』とか? 『今日はブラジル祭り』、だって」 『君のことは忘れない』とか?」

「はあ?」」

「お祭りですー! 今日は勝ちますよーう!」

「あ、 「あれっ? オフェンシブなサイドバックなら私でいいんじゃないの?」 ` 明日葉復活」

「攻めますよ、ミラクルズ!!」

ル・インだけ防いでるだけで、もはやどちらが勝者かは、誰の目にも明らかだった。 力が弱いもので、自陣に張り付けられる、だからすぐシュートまで持っていかれる。 るものではない。その瞬間、ミラクルズが殺到して奪い返される。前へ押し上げる その様、ほとんど『スペース・インベーダー』のナゴヤ撃ち、ギリッギリでゴー 1点を奪われた敵陣、奪ったボールを前に運ぼうとしだすが、慣れないことはや あとは一方的、と言ってよかった。

ない方が、勝つ。 流れ、というのが戦いにはあって、それをうまく掴んだ方が、乗った方が、 離さ

それも悪ノリするのは得意中の十八番だった。 ミラクルズは、流れを掴むのはヘタクソだったが、いったん掴んだ流れに乗る、

コツのひとつは、一番ノってる人間を使うこと。

に即預け、パス・アンド・ゴーのお手本を見せて右タッチを駆け上がる。 ユミがお馴染み猟犬タックルでボールを奪う右サイド、ハーフウェー付近、

駆け上がるユミ姉さんに、パス。 ナナ、一瞬背を伸ばしてルックアップ、敵をすこし、引きつけてその隙を縫って、

姉さん、そのパスを受けるやドリブルの角度を変え、ペナルティエリアめがけま

トン、と立ち止まって、ポイ、とばかりにバックパス、そこに、 意表を突かれた敵選手が右往左往、壁を作って侵入を防ごうとする、その手前で

マキ。

のは難しい、左、可憐、マーカーは一人。 思わず、声と、パスが出た。 フリーで受けた。周りを見た。シュートコースはさすがに無い、右、 ユミに返す

「ワン・ツーッ!!」

鋭いパスが可憐の右脚にピタリ、可憐、思わずニヤリ。

敵、迷う。

天下の此花可憐である、先制点の圧倒的な決定力を見てる、 あの声は指示なんか

じゃなく、ただの掛け声だろう。

ゴールキーパーは、可憐に近いニアをしっかり締めた。それを見計らって、可憐、 その近くにいたすべての選手が可憐の進路を防ぎ、そのボールを奪おうとした。

練習でもこんなに綺麗に決まらない、というワンツーパスが通って、マキ、フリ

ー、ゴール真正面。

そこまでパワー・シュートを見せつけられてたゴールキーパーが、反射で跳んだ。

きょうのマキは、よく周りが見えている。

いま求められていることは、ゴール。

ゴールは、誰もいない場所にシュートを撃つと、入りやすい。

ごくあたりまえのことだが、こんなことすら、興奮しすぎて頭沸騰してるいつも

だと、忘れてる。

チップ・キック。 跳んだのを、見さだめて、ゆったり、 右脚を、かるーく、 振った。

ぽーーーーん....

l .

て、ゴールに吸い込まれた。 ゆるーくやわらかーく、ボールが可愛い弧を描いて、キーパーの身体の上を越え

『クッキアイオーーーーーーーーッ!!』

ィと麻生亮太の得意技である。 イタリア語で「スプーン」、もちろんローマの王子様、フランチェスコ・トッテ

「お、お、お洒落すぎますー! 私も、わたーしーもーーー!」 「あーんな技持ってるなんて! いままで隠していたなんて!」 「マジすか!? マジなんですかマキセンセイーーーーッ!」

無言で固まるFW二人、愛、胡桃。

あんな人を小馬鹿にしたシュート……一生撃てそうにない。 物理的に撃てたとし

世界は広い。

それを教えてくれるのが、サッカーの美点のひとつだろう。

蘭も駆け寄った。長駆忍も、ゴール前から走ってきた。 今度はマキの周りに、ユミもありすも、それから美緒もエレーナも流乃もももも

られたマキ、それでもやっぱり、客席の一点を探して、見つけて、指を差した。 まるで優勝でも決めたかのように、いつのまにか誰かに高く高く抱きかかえ上げ

くしゃくしゃの笑顔とともに。

に笑って、叫んで、ひとりは、泣いて。 差された一団の男の子たちは、同じように指を拳を、突き出していた。同じよう また何人かの、熱烈なミラクル・サポーターが、増えた。

つないで深々とお礼して、駆け戻るベンチ。 タイムアップ、整列礼握手、サポと観客向かって両手を振ってみんなで手を

一番最初に一番高速、もちろん本日の主役、マキ・パメラ・キシワダ。

「ナイスファイト、マキ!!」「……ダイチ!!」

って、腕と脚と頭とつまり全身でフェイス・ハガー。 両腕を広げると、迷うこと無く飛び込んだ。ジャンプ一番、 頭の上からのしかか

「ぶもーーーっ……」

ぎゅぎゅぎゅぎゅぎゅぎゅぎゅぎゅく~~つ……

大地支え切れず、押し倒される。馬乗り状態、 笑み満載。

「アハハハハハハハハッ!

「い、いや、マキのキレがよかった! 僕何もしてない!」 今日やりやすかった! 指示わかりやすかったヨ!」

「マキさん、マキさん、往来でござる。往来でござる」 もちろん興奮の極みにあるラテン娘の耳に入ってようはずもない。

「これからもバンバン命令してネ!

「わかったわかった、わかったから降りて」 アタシ、ダイチのためなら、なんだってするから!」

「マッキー、離れるのじゃー」

「パーメーラー! やーめーらー!」 ひっぺがそうとしたももと忍の腕を振りほどいて、

迫る。 迫り来る超高速リップ・シュートから、 ダイチ、大好きーーーーーッ!! 大地の貞操の危機を守ったのは、

「チェーーーーース!」 古都の作戦ボード、A4サイズ。

「ナイス・こっとん!!」」

「……アガガガガ……

もお、コットン、邪魔しないでヨーッ!」

「します!」

「それより早く降りてください、また変態一座の悪評が広く深く濃く……」

しみ、試合終わりのミラクル劇場。 ありすが促す、居残りの観客がいつものバカをゲラゲラ笑って見ている。 おたの

に・サー!」 「・・・・・チェー、 せっかくドサクサに紛れてダイチにチューしちゃおーと思ったの

ルニッポン!」 「コーチのファースト・キスは、このマネージャーめが全力でお守りいたしマッス

「あはは……や、ファーストじゃないんだけどね」

「ゑ!!」」

立ち上がったコーチ、パンパンとズボンの埃を払いつつ。

「あっ、大地君、その話は、その話はだめ」

キャプテンが真っ赤な顔で袖を引く。

……と、と言うことはまさか……

7 ゴールで勝っちゃったことがあって、観に来てたかあさんがもう感極まっちゃっ 「……中学生の頃さ、ギリッギリの試合を今のマキのループみたいな僕の結構いい

「大地君、大地君」

もう、みなまで、言わないでください。

くて恥ずかしくて死にそうだったよ……って、あれ? みんなどうしたの?」 「……試合終わったらぶっ・ちゅーって、ホントみんなの前だったから恥ーずかし

ブロンズ像のように固まる者、垂れるヨダレを拭かぬ者、 ガックリと失意体前屈

の者。

白い風の塊が、ピッチサイドを吹き抜けた。

この人これさえ無ければ……これさえ、無ければ……

てもこの人はこれがあるから! 女の子に興味が無いん

しょう?でしょう?」

キャプテン……

貴女は本当に、えらい。

「でもこの人はこれがあるから! 女の子に興味が無いんです! ね? ステキで

159

りで、

数日後の、お昼休み。

さていつもどおりランチ広げますかね、と2年の面々が集い机を並べ変えたあた

「・・・・・ミンナ~!」

おやキシワダ先輩。 珍しい。いつも変わらぬラテンの笑顔が輝くその手に、 薄い

板。 あれは・・・・・

「どうされました?」

「およ、そいつぁ最新鋭のタブレットじゃねーすか」

「ウン! これね、ミンナに特にダイチに観てもらおうと思って、持ってきた!」

きの三十六が食いついて、 まだちょっとぎこちない手つきで、そのガジェットの操作をする。デジモノ大好

なかったですやんね?」 かタッチパネルの精度とか全然違ってて……って、マキちゃんこんなん興味あんま 「羨ましいわー、これメッチャ高いねんでー、高級品やねんでー、もう液晶の質と

ーのも覚えていかなきゃいけないかなーって」 「フフッ、そーだったんだけど、ちょっとやりたいことできてー。これからこーゆ

つせー!」 「ええことですな! 有望な最新技術には早よから噛んどいた方が、 結局はトクで

「えと、何しますん?」「へへへ……あ、これ……だったっけ?」

「写真のアルバム見るの」

「ああ、それやったらこれやなくて、こっちです」

ポポン、とアイコンをタップしピンチする。人物写真が、次々に。

「あこれから)):カーフューっていう)・「エッ?」なにこの超美男子!」これ誰、これ誰?」

「あこれウチの弟ー。リョータローっていうの」

「わ、まるで天使と悪魔」

「ルノー?」アタシが天使ダヨネェ?」

「これがパパとママ?」ふふっ、なるほど、この二人からマキちゃんが出てきそ 「ホントだ、あははつ、どっちも素敵だよー」

「アハハ、さすがにジューギョーインの人が半分ぐらいー」 「わーつ、これスゴイよ、何人居るの、これみんな家族!!」

に従える小さいがしかしこんな写真からでもオーラ溢れる老夫が居る。 一〇〇人乗っても大丈夫、的な集合写真の真ん中に、マキとリョータローを両脇

「……こちらが例のオオジーチャンさん、ですね」

美緒の問いにうなずいて、

「タクミが撮ってくれた写真送ったらウチで大騒ぎんなっちゃってさー。で、ビデ

「なんと!」

「それがさー、ダイチ宛なの。で、観てもらおう、 って」

嫌な予感がした。

まあこういう時は、お約束ですよね。

ポン。再生。

『……ウェルカム、大地君!!

このたびはうちのふつつかなひ孫を嫁に貰うてくれるそうで、まったくもってあ

りがたい!!』

ほらー・・・・

『我が、 岸和田農園は、 小さな農園ではある。しかも! 近年ブラジルの紅茶産業

は縮小の一途、高級ブランド志向を強める各産地に押されっぱなしじゃ!』

「いや、あのですね」

「大ちゃん、これビデオメール」

品と自負しておる。この品質に……君の溢れんばかりの指導力、そして勝負の勘所 を見極める決断力が加われば!! 『しかし! 我ら岸和田一族が営々と磨きあげてきた茶の木と茶葉は今もって一級

あるいはまた……』

「匠なに送ったの」

「乗っかってるヤツ」

「よりによってなぜそれを」

「一番『生きてる』写真だったから……あ、 いちおう撮りっぱだけど試合のビデオ

「火に油やんけ……」

「あれ見りゃ誰だって婿に欲しくなるわよね」

に降り立ち、君のその逞しき名の通り根を下ろしてくれる日を、心待ちにしておる 『……このように必勝は疑い得ない! いつでもよろしい、君がこの試される大地

ぞーツ!!』

「あの、それが実は」

「大地、大地、ビデオ、ビデオ」

『……麻紀や。

うなっては……お前の結婚式までは、くたばれんッ! 』 涼太郎が家を継ぐと聞いて、もう思い残すことは無いと思うておったが、

「アハハッ」

『いや、むしろひいひい孫の誕生までは……

いや、そこまでいけばそのひいひい孫がまた大地君のような立派な若者を婿にあ

るいは嫁に取るまで……

一生、死ねんッ!!』

ワシは、ワシは……

「ウン、オオジーチャン、長生き、してネ」

マキの微笑みに、ビデオの中の曽祖父が、笑顔で応える。笑うとクシャッとなる

ところが、ソックリ。

ドゥーーーー・ミラクルズ!!』では大地君、これからもヨロシク。

「だははははははははははははは……」」

意表を突かれて、みんなで笑った。

人生という奇跡を長くやってきた人に、そう言われると、なんだか力が湧いてく

る。

「アハハ……あとパパとママとリョーからも挨拶があるんだけど、見る?」

「見ましょ見ましょ!」

「いや、ちょっと待って、これどうやって収拾つけるの?」 大地が半マジで聞くと、マキ、チッ、チッ、チッ、と指を振って、

「ほおっておけばいーの。

だってそしたらオオジーチャン、ずーっと死ねないでしょ?」

「「なーるほど」」

「いやそんな簡単なものですかー!!」

「もうちょっとえーやんそんなこと、イケメン見せてイケメン」

「お前俺というものがありながらそんな」

「私宇治のお茶農家みたいなの想像してた。これ大農園じゃないのひょっとして

「本場、本場」 「うわあ、このダンス・パーティ楽しそう~!」

が繋がるなんて、亮太郎さんが横浜で船に乗った時には想像できたのだろうか。 小さな板を奪い合うように、みんなで覗きこんで、騒ぐ。こんな小さな板で世界

でも、直接会うには、まだまだ広い。世界は、言葉を交わすには狭くなった。

この暖かい家に。アタシもきっともうすぐ一度は、ウチに帰る。

行き先はわからない。けどきっとまた、出ていくのだろう。

でもきっと家族はいつでも、いつまでも、ここに居て、アタシのことを待ってい また日本かもしれないし、スペインとか、 アメリカとか、全然別のどこかとか。

て、くれるのだろう。

「ねえマキ、これひょっとしてカルナヴァウ?」「マキちゃん、これはこれは?」これはなに?」

「ねえマキ、これひょっとしてカルナヴァウ?」

「はな、それじゃ今可愛くないって言ってるみたいだよ。よし! 今度また本気で 「あ、このちっちゃい時の写真めちゃめちゃ可愛いですね、先輩」

スタジオ借りて! ご家族、驚かせてみせます!」

「お前関係ない」「ほなウチもー」

撮りましょう!

ってくれるのかもしれない。 そしてこの友人達も、それぞれの場所で、 たまにアタシのことを思い出したりも、

リョータに伝えたかったのは、そういうこと。それでいいんじゃないかな、と思った。

今あるものを大切にして、新しいなにかを掴むために、その手を伸ばす。 無くしたものを数えると、足りないものを考えると、キリがない。

それを続けているうちに、人生という旅は、いつか終わりを迎えるのだろう。

それだけの、ことじゃないかなあ。

「……マキさん、やりたいこと、って?」

大地がふと、尋ねた。

「フフッ、それはSecret」

るから」 「アハハッ、アリガト。 「おやつ……はは、でもマキさんなら、なんでもできそうだなぁ。バイタリティあ

「そうですかねぇ……」ダイチも、だよ」

「なにもなければ、農園、継ぐ?」「そうですかねぇ……」

「フフフフッ」「いやいやいや」

「ちょーーーーーっとおおおおおおお!

うせ私のことなんて、ケーキの横に巻いてあるセロファンぐらいにしか思ってない んでしょ!」 私達のことはもういいの!? もう忘れてしまったのマッキー!! どうせ……ど

「あ、それがビデオレター? 見せて見せて」

せないと、またあのお子ら拗ねちゃう。 ももが忍が、胡桃がユミが、3年生がやってきた。この分だと早く1年生にも見

ひとだかりの中心で、マキは笑う。

でも、ちょっとだけ、ホンキ。なーんてことを言ったらきっと、みんなに笑われる。サッカーのコーチになりたい。

リョータたちと遊んだ時間、ダイチの指示で自分が思ってるより輝く自分、

で、もっと・・・・・

そしていつの日にか。

- ^ · · · ダイチのアシスタントとして一緒に日本代表を、

7

ブラジル代表を率いて、日本代表を率いるダイチと対戦する。なんてことができ

最高だ。

たら・・・・・

だからこのごろ、ずっと笑ってる。そんな夢を見るだけで、すっごく楽しかった。

夜中でも、

独りでも。

「……えっ、ちょっと待って、これ初の海外サポーターなんじゃないの?」

「いやあ俺達もワールド・ワイドになりました!」

「なんたってブラジルのおじいちゃんが叫ぶぐらいだもんね!」

「「ドゥーーー・ミラクルズ !! 」

「・・・・・の」

「「あはははははははははははははは……」

旅を続ける旅人達が、いまこの瞬間、 奇跡はいま、起きている。 ここに集っている、 という奇跡が。

本場から来た本物さ。サンバのショーが始まるよ、よってらっしゃいみてらっしゃい、

よければ一緒に踊ろうぜ?爆ぜる手脚は炎もかくや、刻むステップ弾けるリズム、

ファンタジスタでストライカー、背番号なら19番、もちろん10に9を足す。

女王様の番号サ。

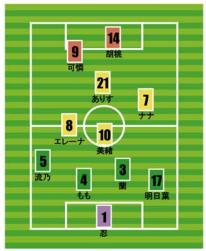
(神の娘)

Never GiveUp, Go Ahead, and DO MIRACLES!

「太陽のラ・ニーニャ」

ミラクルズ・フォーメーション変遷図 (クイーンズカップ・地方予選)

Start 4-4-2 "Double Diamond"



Reserve GK20千里 DF2はなこ MF16由美子 MF19マキ FW11愛

3 83min 4-4-2 "La Nina"



Reserve GK20千里 DF2はなこ FW11愛 OUT DF17明日葉 FW14胡桃

2 58min 3-5-2 "Passista"



Reserve GK20千里 DF2はなこ MF16由美子 FW11愛 OUT DF17明日葉

■あとがき

ありがとうございます。

ながたかずひさです。 お楽しみいただけたでしょうか。

今回はマキちゃんのおはなしでした。

どうしても「望郷」という気持ちを描きたかったんです。

僕が故郷を離れたのは二回通算半年ばかりですが、

それでも小学生時代の、友との(おそらく)永遠の別れはなかなか辛かったです。

大人になってからのほうが、 連絡の手段と可能性があるゆえに、

遠くアメリカなんか行っても「じゃ」「おう」みたいな感じなんですよね。

大阪が僕の故郷になります。 大阪人は自虐ネタが好きで、

幸福度調査みたいなのでも常に下位に甘んじますが、

そんなにひどい土地じゃないですよ。

メシは美味いしネーチャンは……おもろい(笑)

ネーチャン→オカン→オバハンと進化してどんどん強くなります。

土地、風物、歴史も大事ですがいちばん故郷の記憶に結びつくのは……

人じゃないでしょうか。

亮太君ぐらいの歳に「優しくしてくれたお姉さん」の記憶は

男の子にはクッキリ残るものでして、まあ亮太君は幸せ者……かな?

お読み頂きまして、まことにありがとうございました。

貴方様に健康と笑顔のあらんごとを。

■おくづけ

書名 Miracles! Episode 19 太陽のラ・ニーニャ

作者 ながたかずひさ

発行 サークル PowerNetwork!!

発行日 2011年12月31日

Web http://rakken.net/

twitterID KazuhisaNagata

Mail nagata@mti.biglobe.ne.jp

